

サハリン新石器時代前期スラブナヤ 5 遺跡の発掘調査報告

福田 正宏・グリシェンコ V.・ワシレフスキー A.・大貫 静夫・熊木 俊朗・
 國木田 大・森先 一貴・佐藤 宏之・モジャエフ A.・パシェンツェフ P.・
 ペレグドフ A.・役重 みゆき・夏木 大吾・高鹿 哲大

要旨

2013 年、東京大学考古学研究室とサハリン国立大学考古学・民族学研究所は、サハリン島スラブナヤ 5 遺跡第 3 発掘区において発掘調査を実施した。基本層序は、Ⅰ層：表土、Ⅱ層：新石器時代前期文化層、Ⅲ層：地山（基盤層）である。ほとんどの層は埋没後攪拌の影響を大きく受けているが、北側拡張区のⅡ層下部で、炭化物・灰や遺物が堆積するピット状遺構が検出された。出土木炭の ^{14}C 年代は 7500～7100BP に集中する。出土石器のリダクション・モードは、石刃・両面体・磨製石器リダクションからなり、細石刃リダクションは稀である。石刃鏃、石鏃、彫器、搔器、削器、石錐、両面加工石器、磨製石錐、磨製石鏃、磨製棒状石器、石斧、砥石からなる。北海道の石刃鏃石器群との類似性が認められる一方、アムール下流域のヤミフタ遺跡と共通する磨製石器類をもつことが特徴である。出土土器は、2006・2008 年調査第 1、第 2 発掘区古段階の一群と共通する。内面条痕をもつ胴部片がある。これらの土器は、スラブナヤ 4 遺跡例と宗仁式（新石器時代中期：同 5 遺跡新段階）との間に位置づけられる。スラブナヤ 4・5 遺跡出土土器の付着炭化物の ^{14}C 年代は、4 遺跡(8500-7660BP)→5 遺跡古段階(7825-7040BP)→同新段階(7245-6670BP)となる。5 遺跡古段階は、道東オホーツク海側に石刃鏃や平底条痕文系土器がひろがる時期とほぼ並行する。サハリンー北海道間における社会的文化的関係性を解明するには、居住形態等とともに石器組成と土器製法を両地域間で比較した議論が今後必要とされる。

はじめに

旧石器時代、シベリアと環日本海地域には共に、遊動的な食料採集民がいた。更新世から完新世への環境変動のなかで環日本海（「極東」）地域に定着的な食料採集民が登場し、そのうちの大陸側には「極東平底土器社会」とよぶことのできる新石器諸文化が展開する（大貫 1992、2010 他）。

極東平底土器社会と日本列島の先史社会との関わりを考えると、もっとも重要な地域が、環日本海北回りネットワークにおける大陸側の玄関口であり、東シベリアとの交渉もあったアムール河口域である（大貫・佐藤編 2005）。そして、アムールと北海道とを結ぶ位置にあるのがサハリン島である。こうした日本列島北辺地域における完新世の歴史動態を解明するため、筆者らのグループは、日露共同調査を進めてきた（福田 2011；福田他編 2014 他）。（大貫・福田）

1. 調査に至る背景

1) 調査の目的

筆者らは、2011 年度から、おもな研究対象を新石器時代の最温暖期以前に定め、ロシア極東における新

石器的生活構造の定着プロセスや、東シベリア・アムール下流域と北海道・東北との間で生じた文化的断絶（「南北二極構造」）の成立過程、石刃鏃石器群をめぐる関係論などをテーマとした調査研究を遂行してきた（大貫・福田編 2014；福田他編 2014）。

「南北二極構造」とは、ロシア極東考古学でいう新石器時代中期から紀元前 1 千年紀初頭までの長期にわたり、日本列島北辺地域の地域間で生じていた文化系統／動態の非連続性を指している（福田 2014）。一方、これに先だつ新石器時代前期から前期／中期移行期では、石刃鏃石器群が大陸から北海道東部まで展開するという現象がみられる。これは、それ以後の断絶と比較すると一時的な出来事ではあるものの、大陸と北海道の交流を示唆する事例とみなされてきた。

大陸との関係性が想定される道東の石刃鏃石器群については、石器群の年代や、石器群に伴うとされる土器型式の系統に対する議論がなされてきた。最近の研究成果によれば、道東の出土資料の炭素年代はおおよそ 7500～7000BP に集中することが判明している（國木田他 2007）。その一方で、これまで道東の石刃鏃石器群に伴う土器の文様との類似が指摘されてきたアムール下流域の文様帯幅が広いアムール編目文・魚鱗

文や東シベリアの絡条体圧痕文は、最近の我々の調査によれば、より新しい年代に位置づけられることがはっきりしてきた（福田 2011）。一方、サハリンと北海道の関係に関しては、ホタテ貝背圧痕のある土器底部が石刃鍬石器群に伴って出土した事例が、サハリン南部スラブナヤ（Славная）4 遺跡で確認された（Грищенко 2011）ことや、石器群の年代と地域性の様相（森先 2014）などから、北海道とサハリンの相対的な結びつきの強さが注目されるようになっている。これらの成果から考えるならば、石刃鍬石器群をめぐる日本列島北辺域の関係論においては、大陸と北海道を直接対比するより先に、北海道とサハリンの関係を明らかにすることが問題解決の早道であり、「南北二極構造」の成立過程を解明する上でより確かな足掛かりをつくるといえよう。

以上の問題意識にもとづき、石刃鍬石器群を伴う時期を中心とする、新石器時代前期のサハリンと北海道の関係を解明することを目的として、今回の発掘調査が企画された。なお、筆者らのグループによって同じ 2013 年度に北海道で実施された湧別市川遺跡の発掘調査（福田他 2014）は同様の問題意識にもとづいて実施されており、本調査と対をなすものである。

（熊木・夏木）

2) 調査地の選定

調査に先立ち、2012 年 12 月にサハリン国立大学考古学・民族学研究所と東京大学考古学研究室との間で学術交流協定を締結するとともに、翌年度に共同調査を実施することで合意した。その後、調査地選定のための予備調査を 2013 年 5 月 8 日から 11 日にかけてサハリン南部で実施し、アジョールスク（Озёрск）5 遺跡、スラブナヤ 4 遺跡、スラブナヤ 5 遺跡などを巡検した。その結果、スラブナヤ 5 遺跡が、サハリン国立大学による 2011 年度の試掘調査によって新石器時代前期の包含層がよく残っている可能性があると考えられたため、調査対象にふさわしいと判断し、同遺跡の試掘地点周辺を調査対象に決定した。

（熊木・グリシェンコ）

3) 調査の体制と期間

スラブナヤ 5 遺跡の発掘調査は、2013 年 9 月 19 日から 30 日にかけて実施された。参加者は以下のとおりである。大貫静夫・福田正宏・熊木俊朗・國木田大・役重みゆき・夏木大吾・高鹿哲大（東京大学）、森先一貴（奈良文化財研究所）、ワシレフスキー（Василевский A.A.）・グリシェンコ（Грищенко

B.A.）・モジャエフ（Можяев A.B.）・パシンツェフ（Пашенцев П.А.）・ペレグドフ（Перегудов A.C.）・ルシカ（Рушика Г.В.）（サハリン国立大学）。また、2013 年 12 月 18 日から 25 日にかけてサハリン国立大学にて発掘資料の整理作業をおこなうとともに、同月 23 日にはサハリン国立大学にて国際ワークショップ“Study on adaptive strategy and interactive scenarios of the human communities in the island world of the prehistoric Northeast Asia”を開催した。この整理作業及びワークショップには、上記の研究者に加えて佐藤宏之（東京大学）が参加している。

なお、これらの調査は、独立行政法人日本学術振興会二国間交流事業オープンパートナーシップ共同研究「サハリン・北海道間における先史時代文化交流の解明のためのワークショップ」（日本側共同研究代表者：大貫静夫、相手国側共同研究代表者：アレクサンドル・A・ワシレフスキー）、科学研究費助成事業基盤研究（A）「環日本海北回廊の考古学的研究」（研究代表者：大貫静夫）を受けて、東京大学とサハリン国立大学との共同で実施したものである。

また、本調査についてはすでに概要報告（夏木ほか 2014）が公表されており、内容の一部は本文と重複するが、本文の内容が優先する。

（熊木・大貫・ワシレフスキー・佐藤）

2. 遺跡の概要

スラブナヤ 5 遺跡は、ユジノサハリンスク市から北に約 96km、海岸線から約 350m 離れたオホーツク海沿岸に位置する、新石器時代前期の遺跡である（図 1 参照）。

遺跡は、無名の沢が開析する標高 10 ～ 15m の堆積段丘面上に分布する。包蔵地の分布範囲は、南側は遺跡内を流れる沢水による氾濫原、東側は低湿地、北西側は上位段丘面によって囲まれた、針葉樹林が覆う緩斜面上に限定される。居住域は、オホーツク海の旧海岸線あるいは旧海跡湖に面していたと考えられる。こうした立地環境は、サハリン新石器時代中期初頭の大部分の集落に特徴的なものである。また、海岸部に立地する新石器時代前期の遺跡群のうち、海岸部に立地する遺跡・集落群に認められる傾向でもある（Василевский, Грищенко 2002 ; Грищенко 2011）。

遺跡は、段丘上におけるパイプライン敷設に係るモニタリング視察（サハリン II プロジェクト・社会的活動モニタリング）の実施中に、サハリン国立大学（ワシレフスキー・グリシェンコ・カシツウン（Кашицын П.В.）・フェドルチュク（Федорчук В.Д.）・

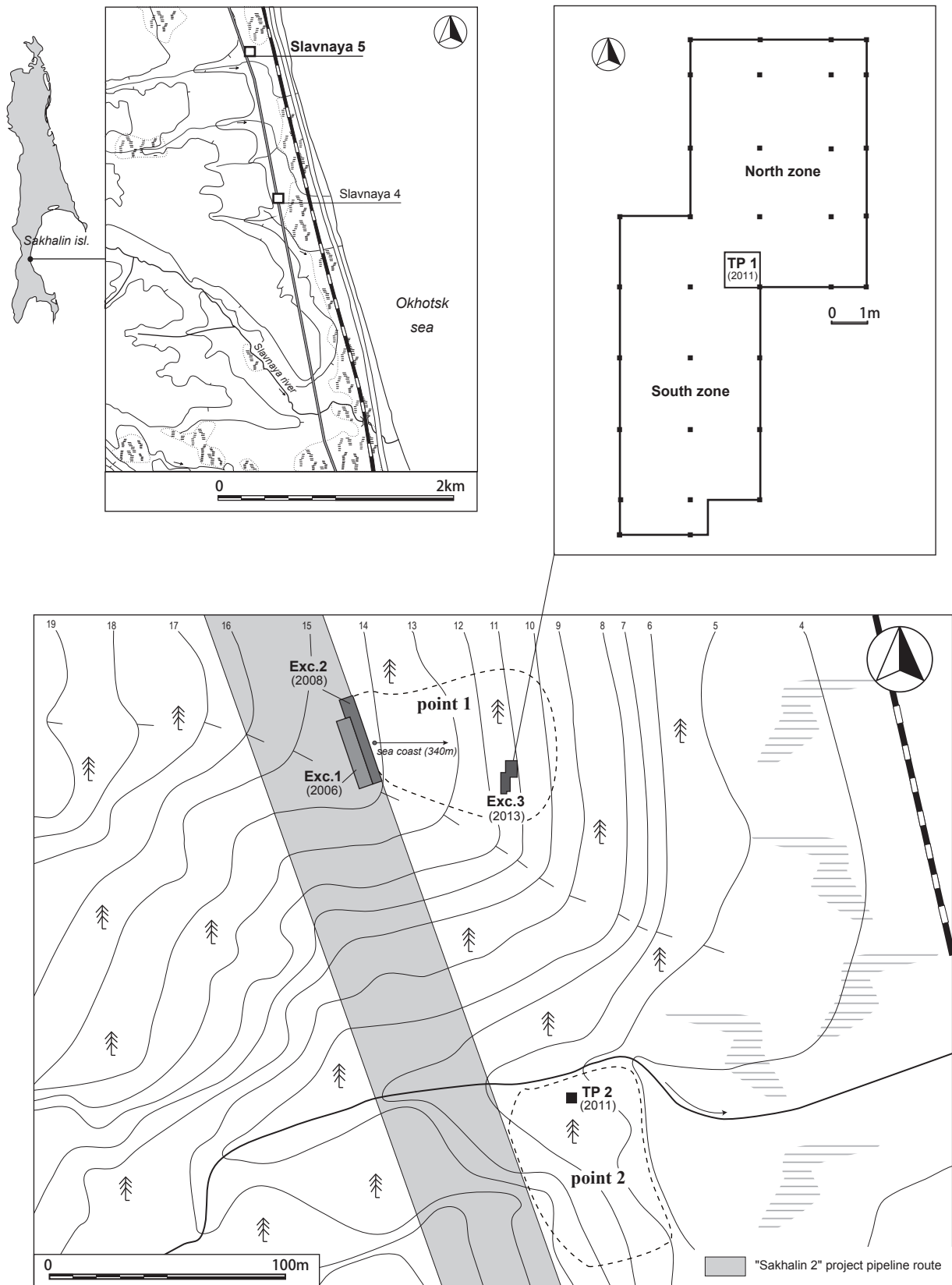


図1 スラブナヤ5遺跡と2013年発掘調査地点の位置
Fig. 1 Location of the Slavnya-5 site and excavation area of 2013

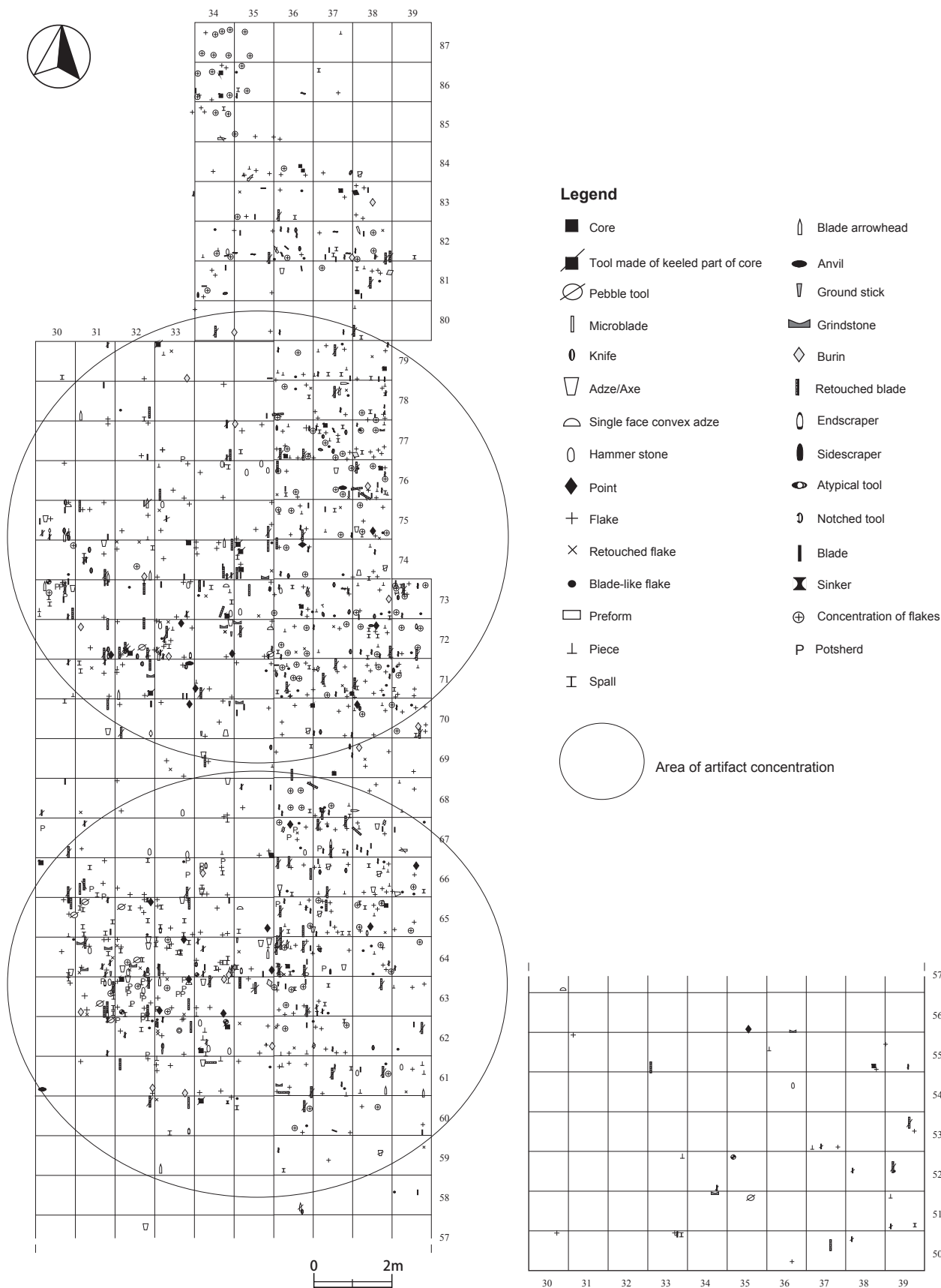


図2 第1、第2発掘区の遺物分布状況 (Грищенко 2011より)
Fig. 2 Artifact distribution in Excavations #1 and #2 (after Grishchenko 2011)

ペレグドフが実施した考古学的調査により発見された。その結果にもとづき、2006・2008年にサハリン国立大学（代表者：グリシェンコ）は、開発区域にかかる第1発掘区（Exc. 1）、第2発掘区（Exc. 2）の緊急発掘調査を実施した（Грищенко, Можаев 2006；Грищенко 2011）。調査総面積は342㎡である。

第1、第2発掘区では、以下の基本層序が確認された（Грищенко 2011）。

I 層 表土・ポドゾル由来の漂白層

II 層 遺構・遺物包含層

III 層 地山・基盤層

遺物に関しては、II層から、多量の石器類、少量の土器片（35点）が出土した。遺物群は、2カ所に集中する（図2参照）。石器は、石刃鏃・石刃石器・石刃核のほかに、手斧、磨製棒状石器、磨石などの磨製石器がある。両端が細く絞り込まれた磨製棒状石器が特徴的である。ほかに、装飾品とみられる玉髓あるいはチャート製と思しき環状石製品が1点出土した。土器は、口縁部と胴部の破片が出土した。新石器時代中期の宗仁式¹⁾に属する第1群と、新石器時代前期に属する第2群とに分類される。後者は、隣接するスラブナヤ4遺跡で出土した新石器時代前期の一群とは胎土組成が異なる。なおスラブナヤ4遺跡では、北海道東部の縄文早期テンネル・曉式に近い、ホタテ貝背圧痕を有する土器底部と¹⁴C年代値が得られている（Грищенко 2011）。

遺構に関しては、II層において、覆土中に多量の炭化物を含む不整形ピット（溝状遺構）が2基検出された。そのうち第1群土器を伴う遺構からの出土木炭の¹⁴C年代は、6550 ± 125 BP (SOAN-6686) となった（Грищенко 2011）。

パイプライン敷設とともに、第1、第2発掘区よりやや低い段丘面に送電線用の鉄塔を建てる計画が浮上した。2011年、ドリンスク地区における遺跡分布詳細確認調査がサハリン国立大学により実施された際、本開発計画に係る事前調査が、調査の一環として実施された。調査担当者はモジャエフである。開発予定区域一帯における遺跡範囲確認調査がおこなわれ、テストピット（TP）1とテストピット（TP）2において、黒曜石製剥片類が含まれる遺物包含層が残っていることが確認された。テストピット1は、第1、第2発掘区から南東方向に約70m離れた地点に位置し、テストピット2は、第1、第2発掘区から南南東方向に約170m離れた沢の右岸に位置する（図1参照）。

2011年調査により、第1、第2発掘区で確認された新石器時代包含層の分布は、テストピット1周辺

までひろがることが判明した。この包含層の分布を、スラブナヤ5遺跡第1地点（Point 1）とした。一方、テストピット2周辺にも同時期の遺物包含層が存在することが判明した。そのため、沢右岸のパイプライン敷設区域と低湿地との間の区域（標高約4～8m）を、同遺跡第2地点（Point 2）とした。

（グリシェンコ・モジャエフ・福田）

3. 調査の経過と概要

1) 調査の経過

2013年は、スラブナヤ5遺跡第1、第2地点より東側における包含層分布範囲の詳細確認を目的とし、2011年調査テストピット1周辺の任意の地点に、計5カ所のテストピット（1m × 1m）を設定し、各々の調査を実施した。また、テストピット1を拡張し、2011年に発見された遺物包含層のひろがる範囲と、それに伴う遺構の有無を確認することにした。なお、同様の目的をもって、第2地点のテストピット2周辺における試掘調査を実施した。本報告では、もっとも多くの情報が得られた、テストピット1を基点とする発掘区の調査結果を報告する。他の調査結果に関しては、後日改めて報告する予定である。

2011年調査テストピット1では、本テストピット（1m × 1m）を基点として、発掘区を順次拡張した。最終的に、テストピット1を基点として、北側へ7m × 5m、南側へ2m × 6～7mの拡張をしたことになる。調査総面積は約65㎡である。2006・2008年調査の第1、第2発掘区と区別するため、今回調査した発掘区を第3発掘区（Exc.3）と呼ぶ（図1参照）。

第3発掘区の調査は、9月20日から30日にかけて実施した。まず、第1、第2発掘区とテストピット1の土層堆積に関する所見を整理した。その結果をもとに、グリシェンコと福田が中心となり、第3発掘区北側拡張区（North zone）の調査を実施した後、同南側拡張区（South zone）の調査に着手した。

出土遺物のとりあげに関しては、遺物が出土した時点で、各々の水平位置と垂直位置を記録した。遺構類（ピット、遺物・焼土・炭化物の集中など）と考えられるプランが確認された際は、面精査をおこない、遣り方測量による平面図を作成した。写真撮影による記録も随時おこなった。

発掘区全域を基盤層まで掘り下げた後、調査壁全体の土層断面図を作成した。そして本発掘区の埋め戻しをおこない、9月30日に調査を終了させた。

（福田・グリシェンコ）

2) 調査の概要

第3発掘区の調査により、Ⅰ～Ⅲ層の基本層序が確認された。これは第1、第2発掘区と共通する。その詳細は、以下のとおりである(図4の土層断面図参照)。

Ⅰ層

表土・芝土、腐植土層およびポドゾルに伴う漂白層。近年の人為・機械攪拌による影響を強く受ける。ピットや遺物集中など、遺構類は発見されていない。

Ⅰ層から、少量の遺物(遺物全体量の約10%)が出土した。土器は、詳細を判別しがたい細片数点のみである。石器は、第1、第2発掘区から出土した遺物と特徴が共通する。それ以外の時代・時期に属する遺物は出土しなかった。層位的前後関係、遺物の出土状況、遺物の特徴から、本層に含まれる遺物群は、Ⅱ層

出土遺物のコンテキスト内に収まる。遺物は、下層から巻き上げられた可能性が高い。

Ⅱ層

本層はⅡa層とⅡb層から構成される。Ⅱa層(褐色ローム質土層)は、粒度がこまかく、重量感がある。灰褐色ローム質土のレンズ状堆積が含まれる。厚く堆積し、しまりがいい。全体的に、炭まじりで均質である。植物根の攪拌痕が所々に観察される。炭化物集中、ピット状遺構が検出された。Ⅱb層(淡黄色ローム質土層)は、Ⅱa層の下部に厚く堆積する。重量感があり、粘性が高い。粒度がこまかく、全体的に均質である。中型・小型の角礫片がまじる。植物根の攪拌による痕跡が所々に観察される。遺構・遺物包含層である。Ⅱb層の遺物は、発掘区全体で水平に散在していた。

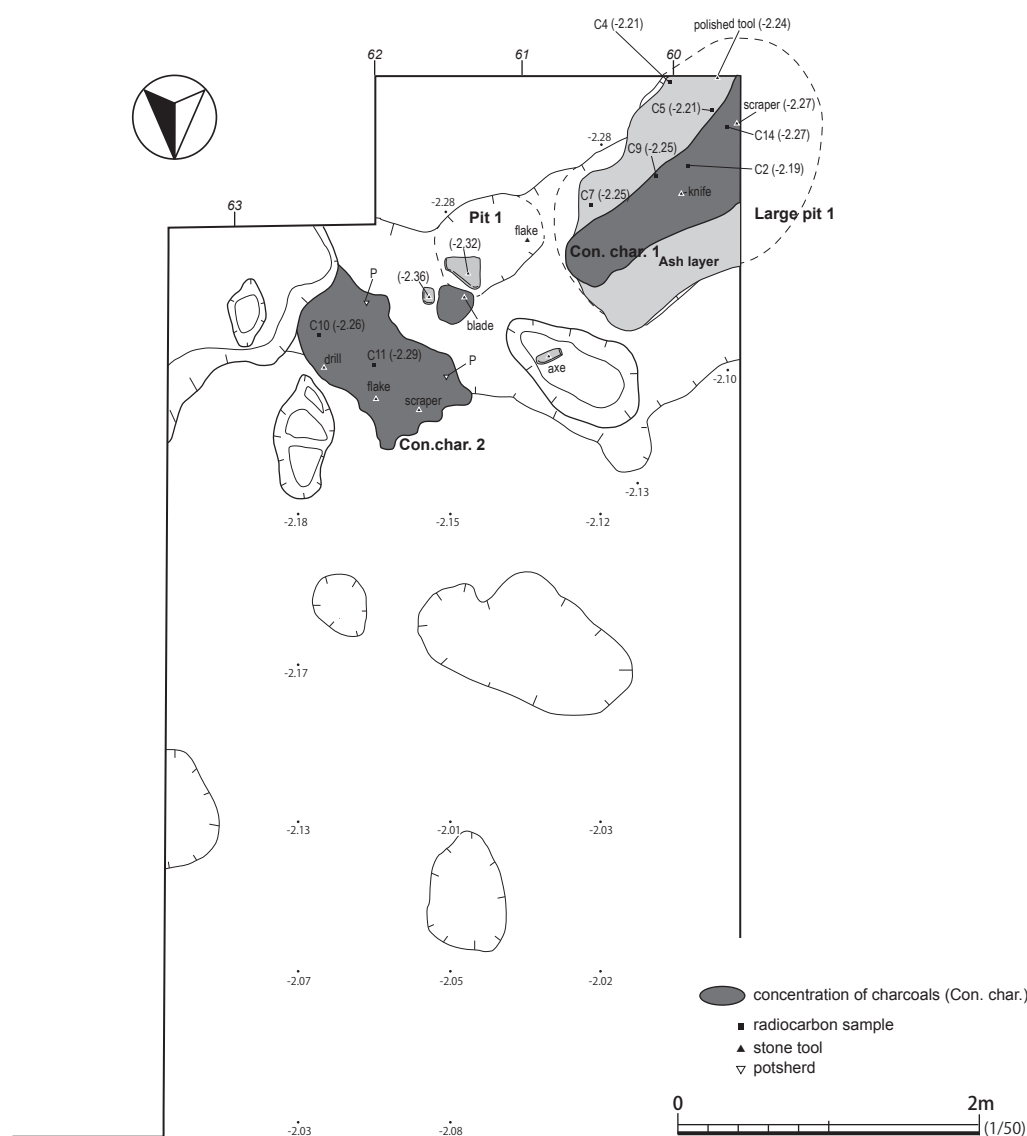


図3 第3発掘区Ⅱ層の遺構確認面検出状況
Fig. 3 The upper part of features in Layer II (Excavation #3)

しかし、埋没後攪拌の影響は本層でも広範囲に及んでおり、原位置を保っていないと考えられる遺物が多数出土した。発掘区北側はとくに、埋没後攪拌の影響を大きく受けていた。比較的明瞭なプランをもつ遺構が検出されたのは、発掘区北側拡張区の南端部である。

Ⅱ b 層から、出土遺物全体の約 90% 相当量の石器・土器が出土した。石器は、ツールが散漫に出土しており、遺構に伴うものは少ない。石器製作をおこなったような状況も乏しい。石刃鏃、石鏃、彫器、搔器、削器、石錐、両面加工石器、打製石斧、磨製石錐、磨製石鏢、磨製棒状石器、磨製石斧、砥石、溝付砥石が認められる。土器は、内面条痕文をもつ胴部破片が数点出土したが、器形復元可能な個体はない。

Ⅲ 層

淡黄色ローム土層。第 1、第 2 発掘区で確認された基盤層と共通する。厚く、重量感がある。粘性が高い。粒度は全体的に粗く、中型・小型の角礫片がまじる。遺物や炭化材など、人為痕跡の認められない地山である。第 3 発掘区北側において、落ち込みの中から石器 2 点が出土したが、これは埋没後攪拌の影響による疑似遺構である。出土遺物は、埋没後に上部から侵入したものである。（グリシェンコ・福田・役重）

4. 検出遺構

第 3 発掘区（南側拡張区）の南壁から北にむかって約 2.5m の範囲内で、遺構群が検出された（図 3～4；写真 1 参照）。Ⅱ b 層中に、すべての確認面がある。調査区南西角の約 2.5m × 約 2.9m の区画内において、炭化物・灰の堆積が 3 カ所で確認され、その下部からは大型ピット 1 基、ピット 2 基が検出された。

炭化物集中 1（Con. char. 1：図 3）

南側拡張区の南西角で、厚さ 8～11cm の炭化物・灰のひろがりが見出された。一部が南壁―西壁にかかるため、全体形は不明である。本来は、不整楕円形もしくは不整長方形にひろがるとみられる。深さ約 0.18m の皿状の窪みの中に堆積する。厚さ 8～18cm の炭化物は、長軸約 1.5m、短軸 0.3～0.5m の範囲内で帯状にひろがる。その下部、約 1.8m × 約 1.1m の範囲内に、厚さ 4～10cm の灰層がひろがる。焼土はみつからない。搔器、磨製棒状石器、剥片類などの石器が出土した。

炭化物集中 2（Con. char. 2：図 3）

炭化物集中 1 から北東方向に約 0.8m 離れた地点で、厚さ約 10cm の炭化物のひろがりが見出された。灰は塊状にまじるが、面的にひろがらない。焼土はみつからない。南東側が大きく攪拌される。北側と

南西側は本来、もう少し先にひろがっていた可能性がある。南西約 0.2m 離れた地点には、約 0.2m 角の炭化物集中が分布する。これはもともと、炭化物集中 2 と一体であった可能性がある。石錐、搔器、剥片類などの石器と土器片が出土した。

大型ピット 1（Large pit 1：図 4）

発掘区南西角の炭化物集中 1 の直下から、ピットが検出された。一部が南壁―西壁にかかるため、全体形は不明であるが、全体平面形はイビツな楕円形／長方形になるとみられる。北東部の壁の立ち上がりは、はっきりと捉えられていない。確認できる最大径は、長軸 1.5m、短軸約 1.2m。深さ 15～20cm と浅く、皿状に窪む。内部は炭化物集中 1 で充填されており、両者の利用に時期差を求める根拠は見えていない。そのため、本ピットと炭化物集中 1 は一体のものであると判断した。

ピット底面は、所々で波打ち、小ピットなど人為痕跡が認められない。壁面の立ち上がりや平面形に、規格性が認められない。また、本遺構周辺におけるⅡ b 層相当の土層堆積の観察から、埋没後攪拌の影響が本ピットに及んだ痕跡は、はっきりと確認されていない。これらの状況から、炭化物集中 1 と大型ピット 1 の組み合わせは、遺物を伴う炭化物・灰が堆積した自然地形の窪み、もしくは自然地形を利用した遺構であると判断した。

前述のとおり、第 1 発掘区では、覆土中に多量の炭化物、底面に礫集中を伴う不整形ピット（溝状遺構）が見出されている（グリシェンコ 2011）。礫集中は伴わないが、炭化物集中 1 と大型ピット 1 の組み合わせは、それらと類似する構造をもっている。

ピット 1（Pit 1：図 4）

大型ピット 1 の東に接して、小型の皿状ピットが検出された。南西側と北西側の壁の立ち上がりは、はっきりと捉えられていない。推定長軸約 0.76m、短軸 0.58m、深さ約 12cm である。覆土中に、混入物は含まれていたが、目立たなかった。遺構確認面から掘り方にかけて、径 30cm 弱の板石 1 点が、ピット壁面に沿って出土した。自然地形の窪みの中に遺物などが溜まった痕跡の可能性もある。

ピット 2（Pit 2：図 4）

南側拡張区の南東角付近、炭化物集中 2 の直下から、ピットが検出された。一部が壁面にかかり、また、炭化物集中 2 とともに東半分は上部からの埋没後攪拌を大きく受ける。そのため、全体形は不明である。西壁のみ、掘り方を確認・検出することができた。炭化物集中 2 の堆積のつづきと考えられる炭化

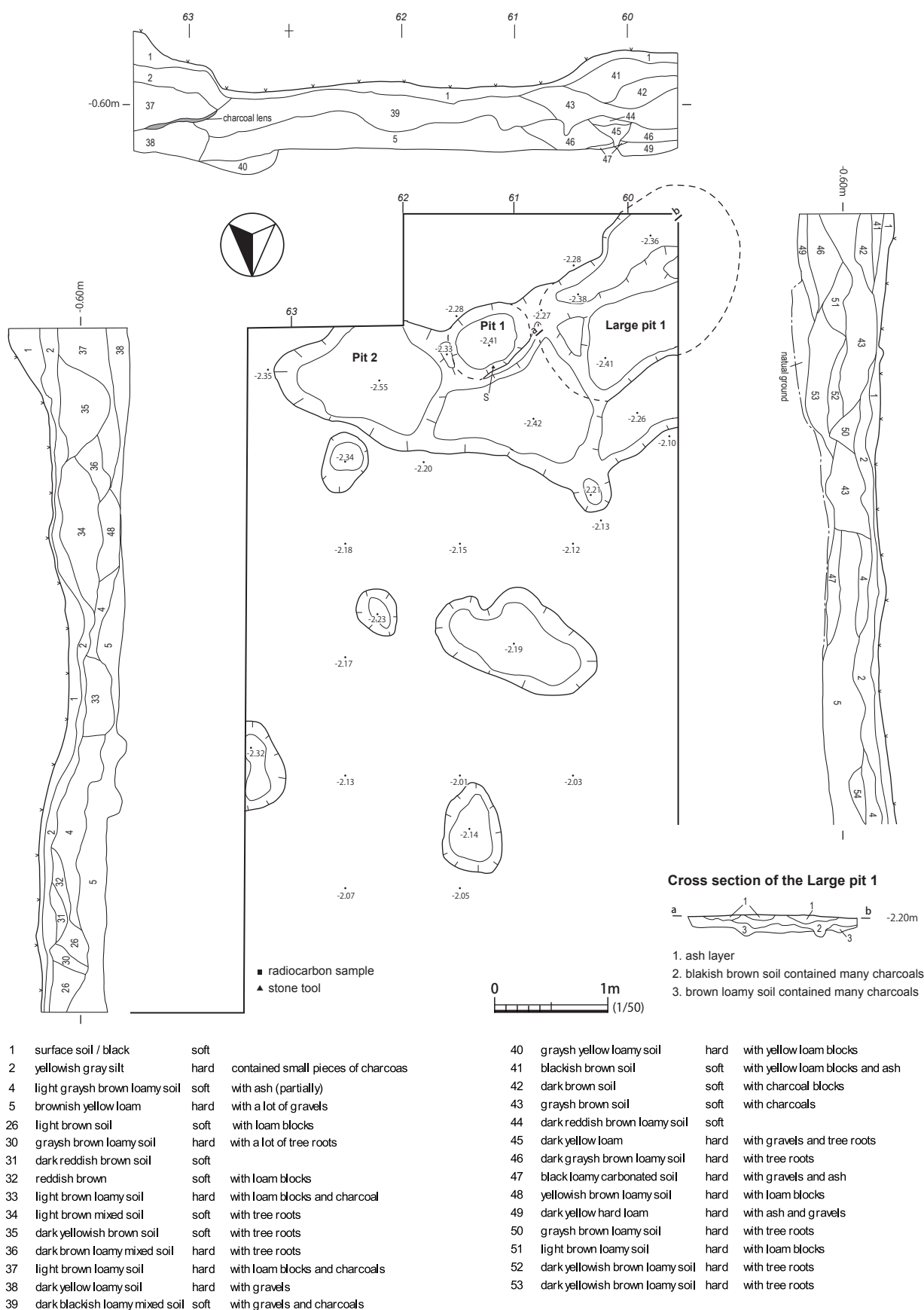


図4 第3発掘区II層の遺構平面図および北側拡張区壁面土層断面図
Fig. 4 Plan of features in Layer II and stratigraphic profiles in the north zone of Excavation #3.

物が、覆土中に多く含まれる。そのため、大型ピット 1 とおなじく、ピット 2 は炭化物集中 2 と一体のものであると判断した。ただし、伴出遺物はごくわずかであり、覆土やピット底面にまで攪拌が大きく及ぶため、遺構認定が難しい。未検証ではあるが、植物根などによる疑似遺構の可能性は否定できない。

(福田)

5. 出土遺物

1) 石 器 (図 5 ～ 10、PL. 3)

本遺跡では、Ⅰ層、Ⅱ層から石器が出土した。石器群の大半は、遺物包含層であるⅡ層からトゥールが散漫に出土しており、遺構に伴うものは少ない。石器製作をおこなったような状況も乏しい。

リダクション・モードは、長狭で薄い石刃を連続的に剥離する石刃リダクション、両面体リダクション、磨製石器リダクションからなる。本遺跡では細石刃リダクションは非常にまれである。

石器組成には、石刃鏃、石鏃、彫器、搔器、削器、石錐、両面加工石器、打製石斧、磨製石錐、磨製石鏢、磨製棒状石器、磨製石斧、砥石、溝付砥石が認められる。以下、図化した主な出土石器の特徴について、個別に記載する^{2) 3)}。

剥片石器

図 5 - 1 ～ 5 は石鏃で、うち 1 ～ 4 は石刃を素材とした石刃鏃である。1 は極めて薄く細い石刃を素材とし、両側縁の腹面側に向けて、非常によく整った緩い角度の細加工を施し先端をとがらせたもの。基部は急角度の加工で凹基とする。先端部右側縁にも同様の加工が施される。長さ 3.1cm、幅 1.0cm、厚さ 0.3cm、黒曜石製。2 は 1 に比べるとやや厚く、厚みも均質でない石刃を素材とし、両側縁の腹面側に向けて、緩い角度の細加工を施し先端をとがらせたもの。基部は腹背両面に向けた加工で凹基とする。長さ 3.4cm、幅 1.2cm、厚さ 0.5cm、黒曜石製。3 は薄く細い石刃を素材とし、両側縁の腹面側に向けて、整った緩い角度の細加工を施したもの。基部は急角度の加工で凹基とする。先端が欠失する。長さ 4.4cm、幅 1.3cm、厚さ 0.4cm、珪質頁岩製。4 は折りとった石刃を素材とし、両側縁の腹背両面に緩い角度の細加工を施して先端をとがらせ、器体中ほどの両側縁に抉りを入れたもの。基部には折れ面から数回の加工を施す。長さ 4.5cm、幅 1.9cm、厚さ 0.8cm、黒曜石製。5 は厚手の素材を用い、腹背両面によく整った緩い角度の細加工を施し基部と先端を作り出したもの。正面左側に自然面を残す。長さ 3.9cm、幅 2.3cm、厚さ 0.8cm、黒曜石製。

6 ～ 9 は彫器である。6 は厚手大型の稜付石刃の折れ面から左側縁に向けて数回の槌状剥離を加えた側刃形。長さ 6.9cm、幅 3.4cm、厚さ 1.5cm、黒曜石製。7 は石刃を素材とし、やや緩い角度の細加工で作出した打面から器体右側縁に槌状剥離を加える。基部にも弧状の刃部を作り出しており、搔器・彫器の複合石器と思われる。長さ 5.8cm、幅 2.0cm、厚さ 0.8cm、黒曜石製。8 は厚みが均質で整った形状の石刃を素材とし、折れ面を打面として左側縁は上端から、右側縁は上下両端から、槌状剥離を施した側刃形。長さ 5.6cm、幅 1.8cm、厚さ 1.0cm、黒曜石製。9 は石刃を素材とし、器体両側縁に向けて槌状剥離を施した交叉刃形。打側縁には緩い角度の細加工を施している。また裏面には上下方向からの極めて薄い剥離痕があり、素材はもともと両極打法により消費されていたとみられる。長さ 4.1cm、幅 1.9cm、厚さ 0.8cm、黒曜石製。

図 6 - 1 ～ 6 は搔器・削器などのスクレイパー類である。1 は搔器である。薄手で弱く湾曲した大型石刃を素材とし、上半両側縁の背面側に向けてよく整った緩い角度の細加工を施し、下半にはやや急角度の細加工を施して左肩上がりの弧状刃部を作り出す。長さ 11.3cm、幅 2.2cm、厚さ 0.7cm、黒曜石製。2 は長狭な削器である。大型石刃を素材とし、両側縁の背面側に向けてやや緩い角度の細加工を全面的に施して刃部とする。長さ 12.0cm、幅 1.5cm、厚さ 0.8cm、黒曜石製。3 は削器である。石刃を素材とし、両側縁の背面側に向けてよく整ったやや緩い角度の細加工を全周に施して刃部とする。右側縁には屈曲部を作り出す。長さ 9.0cm、幅 1.8cm、厚さ 0.8cm、頁岩製。4 は搔削器である。強く湾曲した大型石刃を素材とし、素材打面側および両側縁の背面側に向けてよく整った緩い角度の細加工を施して弧状刃部を作り出す。長さ 10.5cm、幅 2.5cm、厚さ 1.0cm、珪質頁岩製。5 は搔器である。薄手の石刃を素材とし、やや緩い角度の細加工を施して右肩上がりの弧状刃部を作り出す。長さ 5.3cm、幅 1.4cm、厚さ 0.3cm、珪質頁岩製。6 も同様の石器とみることができ、アムール下流域でみとめられる、石刃打面部および片側縁上半に緩い加工で刃部を作り出したナイフにも似る。長さ 8.0cm、幅 1.9cm、厚さ 0.5cm、頁岩製。

7 ～ 9 は石錐である。7 は石刃を素材としているとみられ、その全周を緩い角度の細加工で大きく整形し、下半に断面菱形の尖頭部を作り出したもの。長さ 5.5cm、幅 1.5cm、厚さ 1.0cm、珪質頁岩製。8 は石刃を素材とし、その打面側に両側縁から両面にやや緩い角度の細加工を施し尖頭部を作り出したもの。長さ

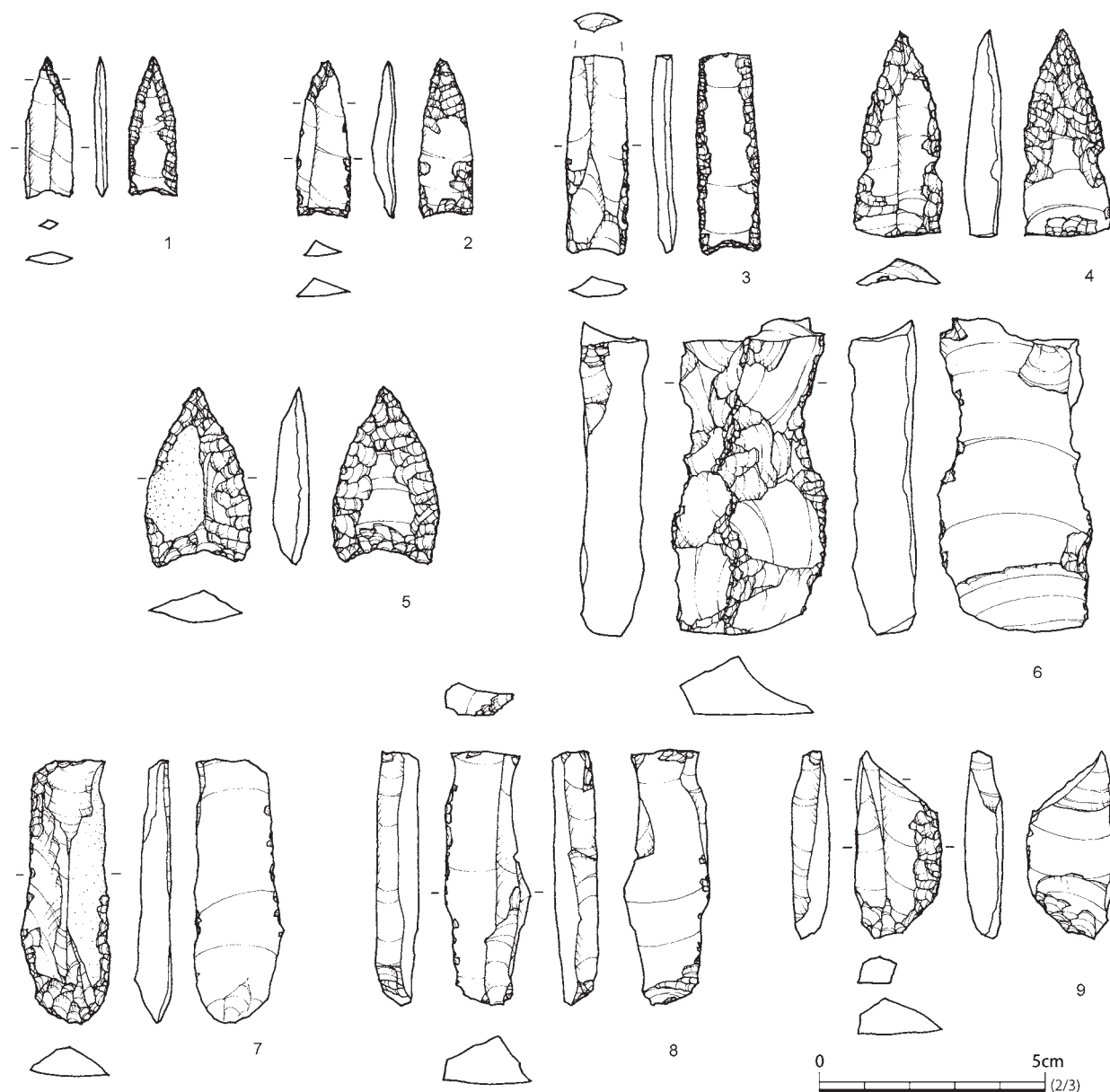


図5 第3発掘区出土石器(1)
Fig. 5 Stone tools from Excavation #3 (1)

6.5cm、幅 1.7cm、厚さ 0.8cm、頁岩製。9は石刃を素材とし、両側縁の両面側にやや緩い角度の細加工を施し、下端に断面多角形の尖頭部を作り出したもの。長さ 8.9cm、幅 1.5cm、厚さ 0.8cm、珪質頁岩製。

図7-1・2は石刃である。薄い調整打面をもつ。大きさに対して厚みが薄く、側縁・稜線もよく並行しており、かなり規格性の高い石刃を生産していたことがうかがえる資料である。1は長さ 8.8cm、幅 2.0cm、厚さ 0.5cm、黒曜石製。2は長さ 8.2cm、幅 1.3cm、厚さ 0.5cm、黒曜石製。3は石刃および細石刃を剥離した痕跡のある石核である。亜角礫を分割し、そのうちの一面を打面として打面調整と頭部調整を施したう

えて石刃・細石刃を剥離している。

両面加工石器

図7-4は両面加工尖頭器である。素材は不明であるが、裏面上部に節理面が小さく残る。緩い角度の大きな剥離で大まかに形状を整えたうえで、周縁に緩い角度の細加工を施して仕上げている。先端と下半を欠失する。長さ 6.1cm、幅 4.6cm、厚さ 1.0cm、黒曜石製。5は両面加工石器である。大型剥片を素材とし、緩い角度の大きな剥離で大まかに木葉形に整えたものである。裏面側縁中ほどには、やや細かい加工も認められる。尖頭部は作り出しておらず、上端に自然面を残す。長さ 14.1cm、幅 6.6cm、厚さ 1.9cm、安山岩製。



図 6 第3発掘区出土石器(2)
Fig. 6 Stone tools from Excavation #3 (2)

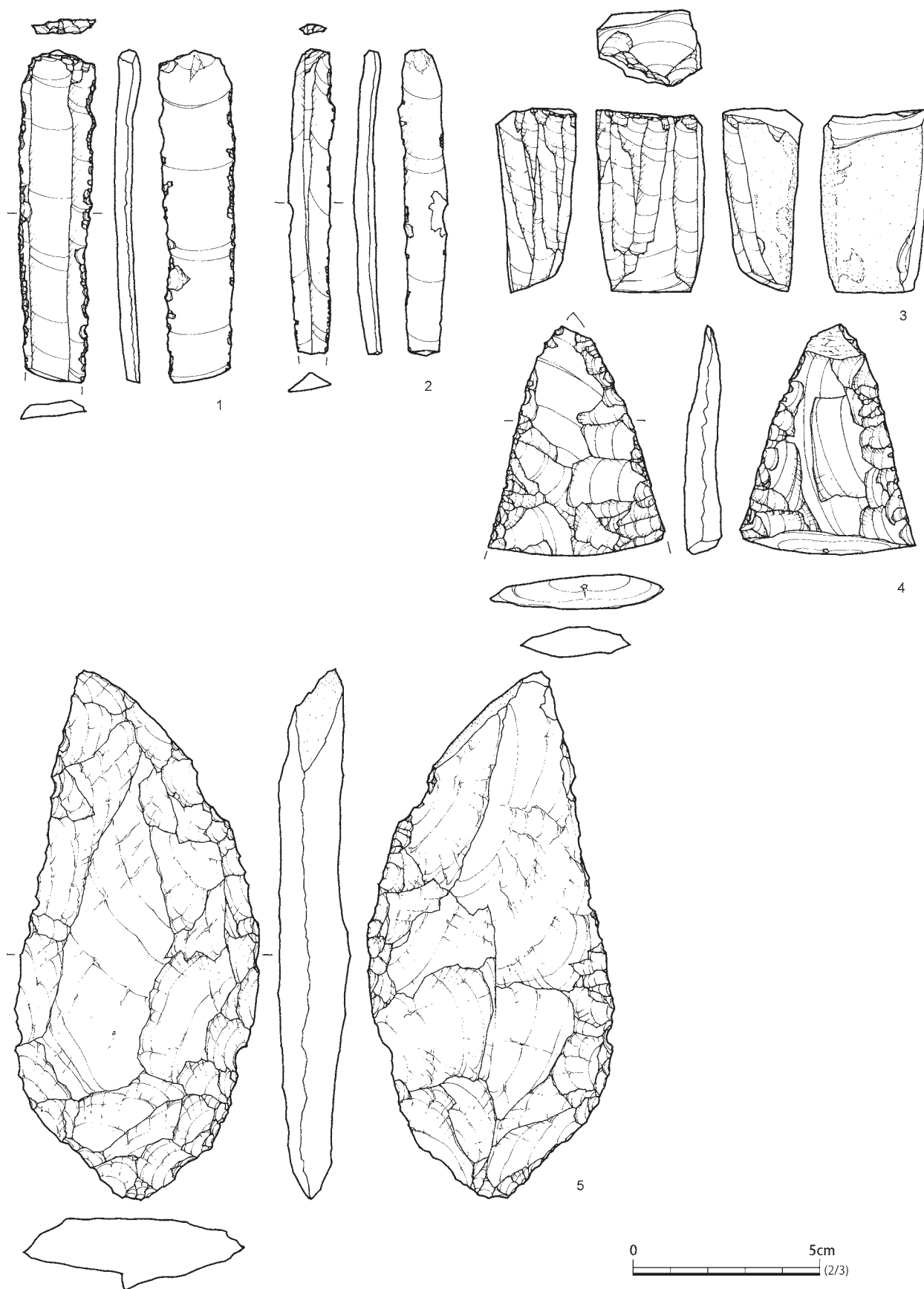


図7 第3発掘区出土石器(3)
Fig. 7 Stone tools from Excavation #3 (3)

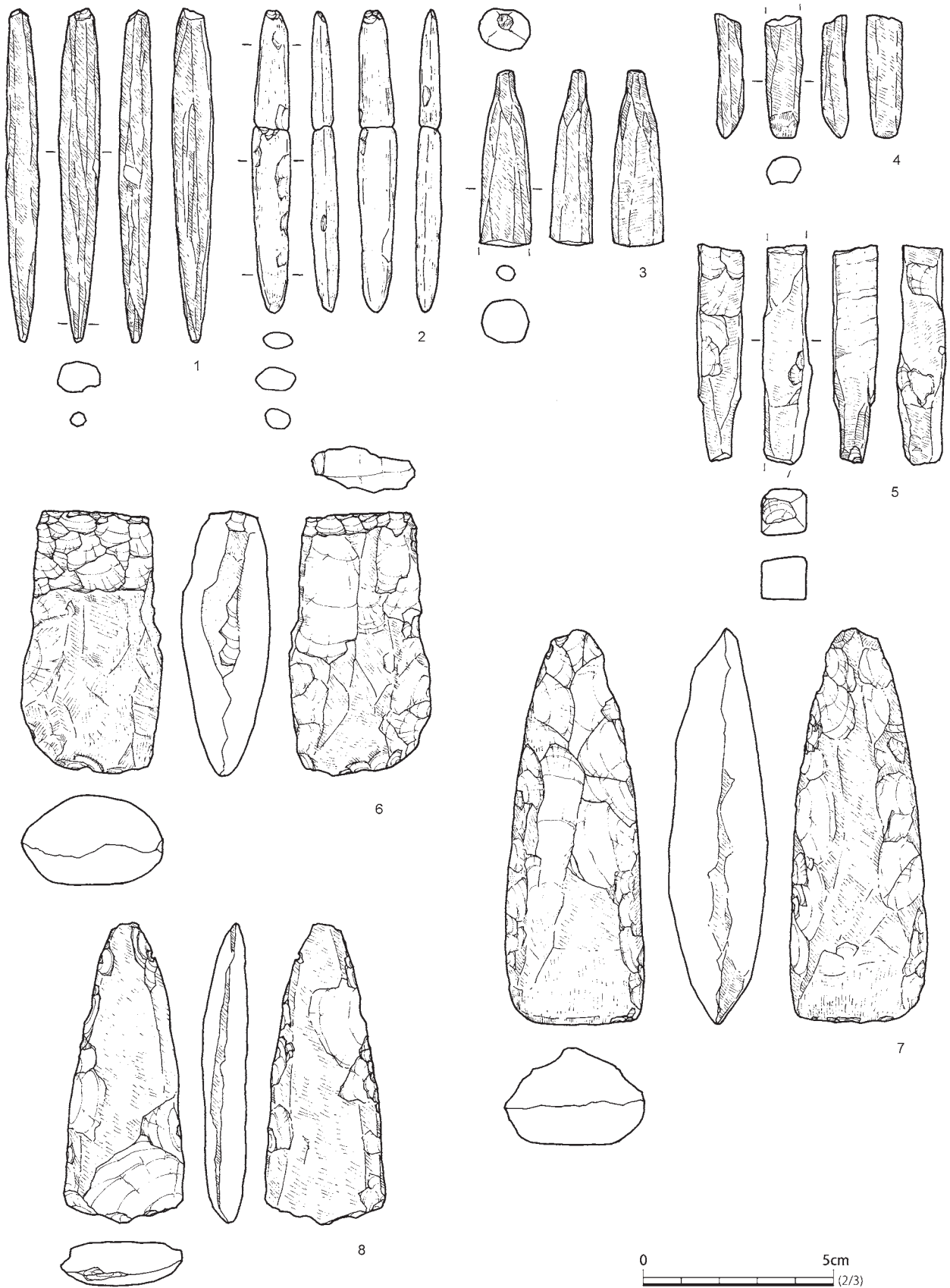


図8 第3発掘区出土石器(4)
Fig. 8 Stone tools from Excavation #3 (4)

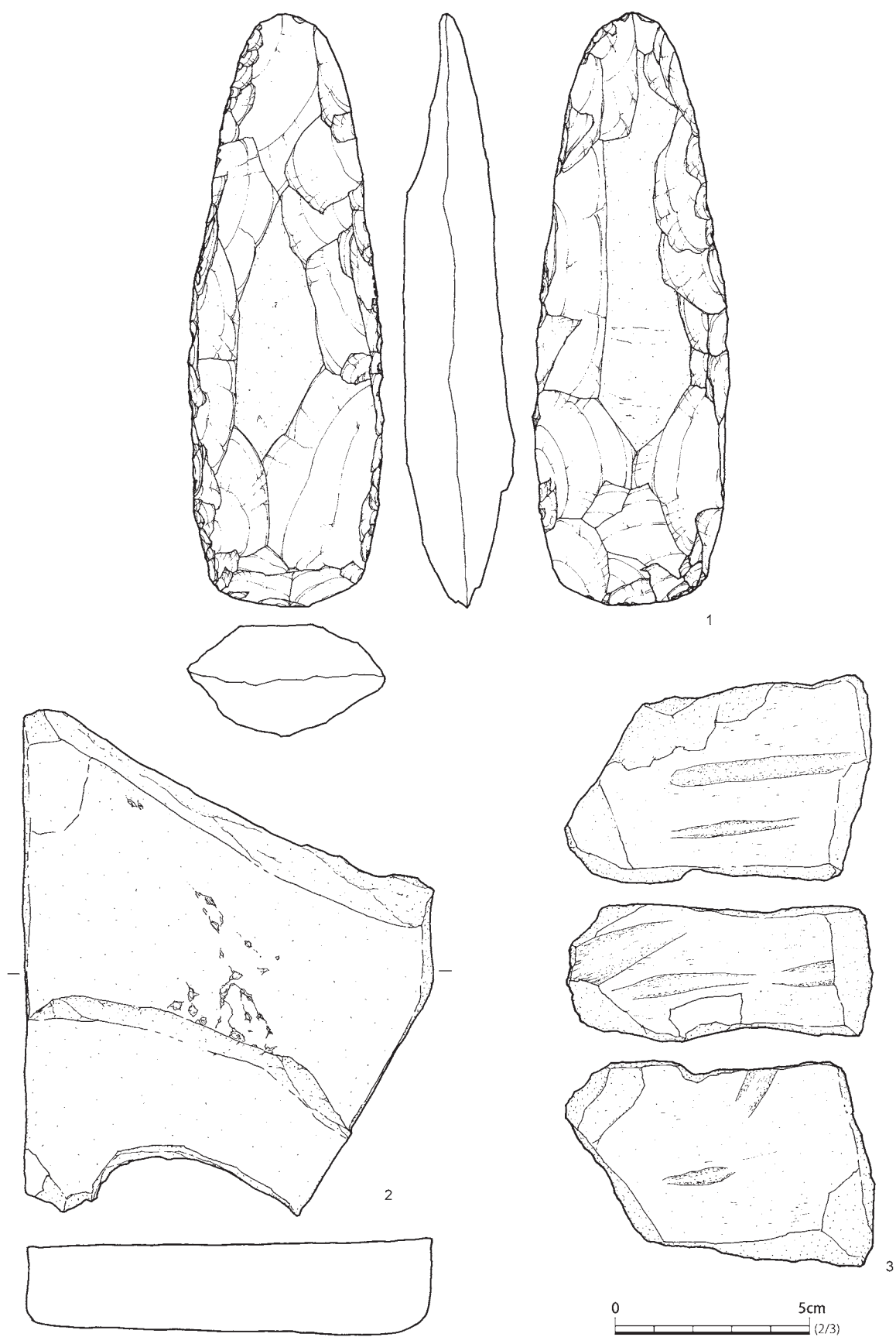


図9 第3発掘区出土石器(5)
 Fig. 9 Stone tools from Excavation #3 (5)

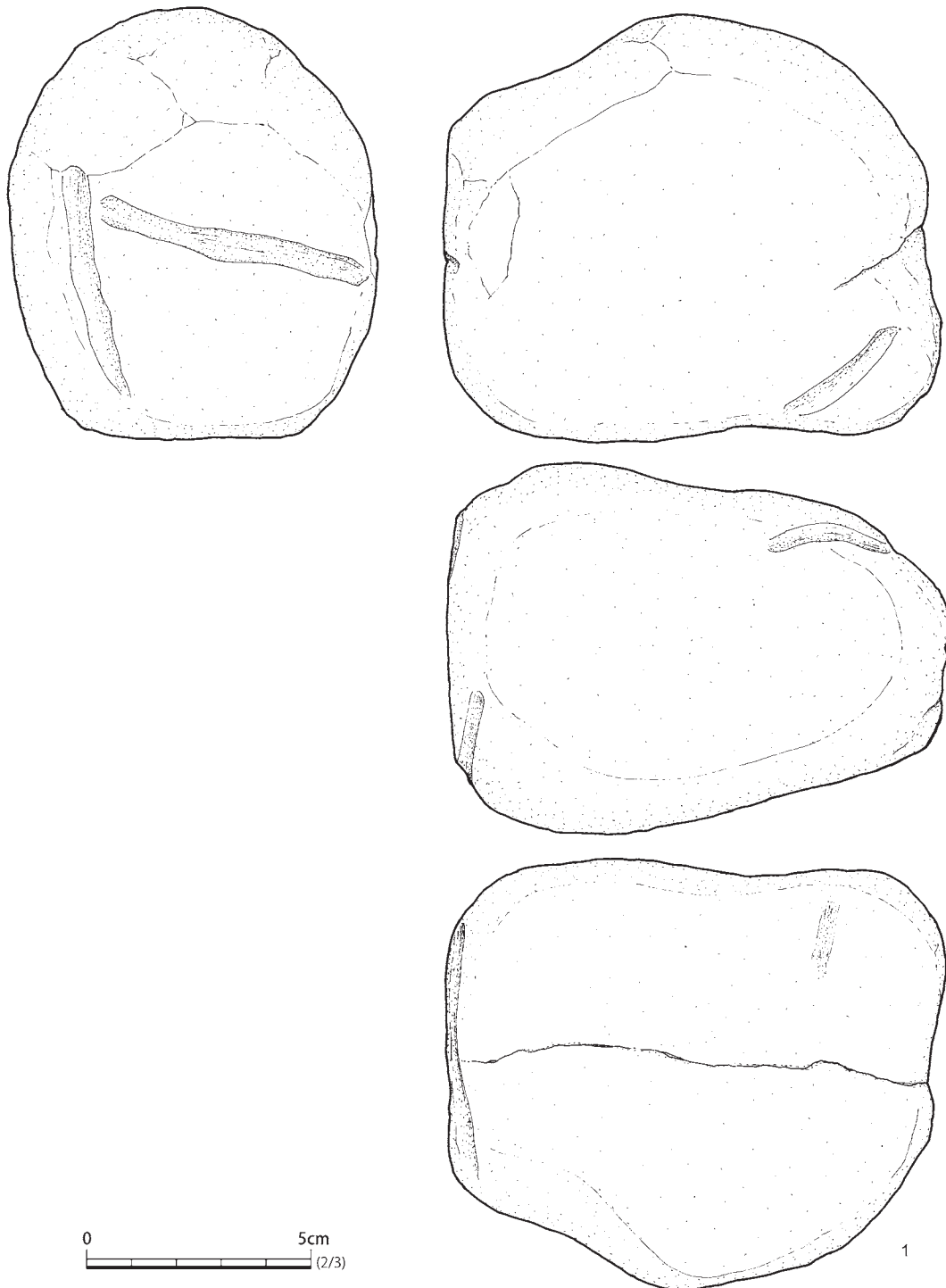


図10 第3発掘区出土石器(6)
Fig. 10 Stone tools from Excavation #3 (6)

磨製石器

図8-1～8は磨製石器である。1は磨製石錐である。全面を左上一右下方方向に細かく研磨し、よく面取りされなめらかな表面に仕上げ、下端に断面略円形の尖頭部を作出したもの。長さ8.7cm、幅1.2cm、厚さ0.8cm、泥岩製。2は磨製棒状石器と仮称しておく。全面を上一下方向に研磨したもの

で、機能部が明確ではない。長さ7.9cm、幅1.0cm、厚さ0.6cm、泥岩製。3は磨製棒状石器である。全面を左上一右下ないし左一右方向に研磨し、上部を細く整形している。上端は尖らず、平らに研磨してある。下半を欠失する。長さ4.6cm、幅1.3cm、厚さ1.1cm、緑色岩製。4は磨製石鑿である。全面を左上一右下ないし左一右方向に研磨し、下端に平らな片刃

を作り出す。上半を欠失する。長さ 3.2cm、幅 1.0cm、厚さ 0.7cm、泥岩製。5 は磨製棒状石器である。全面を左下―右上ないし左―右方向に研磨している。上半部は断面四角形、下半部はより細く整形されており、断面が多角形となる。両端が細く絞り込まれた磨製棒状石器は、ロシアではネットシンカーと見る考えもある（Василевский 2008 他）。長さ 5.7cm、幅 1.2cm、厚さ 1.2cm、砂岩製。6 は磨製石斧である。基部側は上端の平坦面から周を巡るように器体表面に加工を施し、厚み・幅が減じられている。着柄に伴う加工であろう。研磨方向は上―下、左―右、右―左と多様である。刃部は緩い弧状をなす。長さ 6.8cm、幅 3.7cm、厚さ 2.3cm、泥質ホルンフェルス製。7 は磨製石斧である。表裏面および側面を概ね左―右方向に、刃部を上―下方向に研磨し、撥形に仕上げている。刃部は直線的で、使用に伴うとみられる微小な剥離痕が残る。長さ 10.3cm、幅 3.6cm、厚さ 2.6cm、泥質ホルンフェルス製。8 は磨製石斧である。表裏面および側面を左―右方向に研磨し、撥形に仕上げている。刃部側には大きな剥離痕が残り、本来の刃部は欠失しているとみられる。長さ 7.8cm、幅 3.2cm、厚さ 1.2cm、泥岩製。

礫石器

図 9－1 は打製石斧である。両面に節理面を残す板状素材を用い、素材両側縁から両面に向けて緩い角度の大きな剥離で形状を略撥形に整える。下半はより細かい加工で直線状に仕上げている。長さ 15.3cm、幅 5.0cm、厚さ 2.9cm、泥岩製。2 は台石・砥石である。板状の素材の一面に一方方向の擦痕が認められる。それに重複して、鋭くかたい物質による強い衝撃でできた鼠歯状痕がいくつも認められる。両極打法の台石の可能性が高い。長さ 13.1cm、幅 10.4cm、厚さ 2.5cm、砂岩製。3 は溝付砥石である。直方体状の各面に一方方向の擦痕がみられるほか、各面に、内面に激しい擦痕の残る玉砥石状の研磨溝が認められる。数多く出土している磨製石斧・磨製棒状石器の仕上げに用いられたものであろう。長さ 7.7cm、幅 5.2cm、厚さ 3.4cm、砂岩製。図 10－1 も同種石器で、より大型の砂岩礫各面に研磨溝が残る砥石である。長さ 10.8cm、幅 9.5cm、厚さ 8.0cm、砂岩製。

小 結

本遺跡から出土した石器群には石刃鋸を含む石刃石器が多く認められ、両面加工石器や磨製石器も存在する。本遺跡では新しい遺物の混入が少なく、また極東新石器時代では石刃鋸にともなうことがしばしばある両面加工石器・磨製石器を敢えて石刃石器群から分離

する理由もないため、以下では一括して言及したい。

技術的な面では、打面調整を施し、薄い打面をもち、両側縁および稜線がよく並行する石刃が特徴的である。石刃にはいくつかの種類があるとみられ、すくなくとも石刃鋸に用いられる幅 2.0cm 未満、厚さ 0.5cm 前後のものと、スクレイパー類やドリルなどに用いられる幅 2.0cm 以上、厚さ 1.0cm 前後の大型のものに分けることが可能である。前者の石刃に加えて細石刃とも呼べる石刃を剥離したであろう図 7－3 の石核には、やや大きい石刃が剥離された形跡もあるが、スクレイパー類を製作した石刃よりは明確に小型である。両者間の懸隔は大きく、中間形が少ないという印象があるが、本石器群からでは、これら大小の石刃が同一の石核リダクションでもたらされるかどうかを確言することはできない。

石刃石器組成には腹面側調整を主とし、薄手幅狭の凹基式石刃鋸が含まれており、また非対称刃部をもつスクレイパー（いわゆる「常呂型ナイフ」を含む）も認められるなど、北海道東北部に 7500～7000 BP（國木田他 2006）ごろに広く展開する石刃鋸石器群に対比できる資料を含むことは確かであり、年代の一端を示していよう。

ただし、本石器群にアムール下流域のものと共通する磨製石器が存在することは無視できない。北海道の石刃鋸石器群にも擦切磨製石斧は認められるが、本石器群に含まれる磨製石錐・磨製石鑿・磨製棒状石器はアムール下流域のヤミフタ（Ямхтинская）文化に類例がある（福田他編 2014）。また、北海道では頻出する石錘が本遺跡には少ないといった違いもある（佐藤 2014）。こうした点は、サハリン南部と北海道東部の石刃鋸石器群が、相互に影響をもちつつも、まったく同一の人間集団によって荷担されたのではないことを示唆しており（森先 2014）、両者間の共通点と相違点を丹念に点検し、整合的な説明を加える必要がある。（森先）

2) 土 器（写真 2）

資料の状態と所見

土器はごくわずかである。土器の一部とみられる細片も数点回収されているが、1cm 角にも満たない極小ものばかりである。第 3 発掘区出土土器のうち、観察可能な資料全点の内外両面の写真を、写真 2 に掲載した。

すべて、器厚 5～8mm の胴部片である。外面剥落が多く、資料自体の摩耗が著しい。肉眼観察では文様を確認していない。口縁部や底部がなく器形を推定し

にくいが、深鉢の一部とみられる。色調は浅黄～黄褐色、暗灰黄色で、焼成温度は低い。胎土に植物繊維、砂粒、小礫がまじる。混和された小礫などが脱落した空隙が、所々に確認される。

基本的な成形は、「紐作り」によるものである。写真 2-2 の下部は、粘土紐下部で破損している。また、小型の粘土塊あるいは粘土板の継ぎ足しによる器厚調整痕が、ほぼすべての破片にみられる。継ぎ足し痕が残し、平滑化されていない箇所がある。

調整痕が確認できる破片の内外面には、斜方向のナデが施される。全体的にナデは粗雑で、ミガキ残しや指ナデ痕は認められない。最終的な器面調整には、植物質（草本類？）の工具が使われた可能性がある。写真 2-8 の内面には、横方向の条痕が認められる。同 1 の内面にも条痕が残る可能性はあるが、判然としない。（福田・グリシェンコ）

小 結

グリシェンコは胎土組成に注目し、スラブナヤ 5 遺跡第 1、第 2 発掘区出土土器群を、大きく二つに分類した（Грищенко 2011）。第 1 群は宗仁式に比定される一群である。第 2 群は、それらより緻密な粘土が用いられ、胎土に有機物が少なく、小礫が多く、器壁の薄い一群である。第 2 群に関しては、スラブナヤ 4 遺跡例と比較され、スラブナヤ 5 遺跡例のほうが、胎土に含まれる鉱物由来の混和材に細かい選別が認められるとされた（同前）。

第 3 発掘区例にみられる植物繊維の胎土への混和、粘土の継ぎ足しによる器厚調整は、新石器時代中期・宗仁式土器の観察所見（福田他 2012）にも通じるものである。しかし、微隆起線をもち上面略方形となる典型的な宗仁式と、第 3 発掘区例との間には大差がある。通常、宗仁式では条痕文がなく、器面が入念にナデつけられる。

第 3 発掘区例の特徴は、第 1、第 2 発掘区の第 2 群と、基本的には共通する。ただ、内面条痕をもつ資料がある点は異なる。サハリン南部で条痕文をもつ類例は、スタロドゥフスコエ（Стародубское）3、ポリチエ（Поречье）4 遺跡などにある。これらは、石刃鍬石器群を伴うことから、浦幌式など、北海道東部・縄文早期の条痕文系土器群と対比されてきた経緯がある（Василевский 2008；Грищенко 2011）。

地理的に近接する道東オホーツク海沿岸域の条痕文系土器の変遷と直接対比できる類例は、サハリン南部において発見されていない。また、サハリン南部の類例に特徴的な文様が見あたらないことも、型式認定を難しくする。条痕文は、ほぼ同時期のアムール下流域

にも存在するため、その存在のみから、北海道側との単線的な接触・交渉関係は導きだせない。

現状から、第 3 発掘区例も含むスラブナヤ 5 第 2 群は、スラブナヤ 4 例よりは新しい、新石器時代前期—北海道の縄文早期並行であるとはいえる。宗仁式に類似した成形・胎土組成・器面調整が認められるので、スラブナヤ 5 第 2 群は宗仁式に近づく。

宗仁式成立前のサハリン島には、「プロト宗仁式」とよばれる一群がある。略方形／略楕円形の上面形を有することなどから、系統論的には、宗仁式直前に位置づけられる類いである（Шубин 2008；ヤンシナ他 2012）。それとはべつに、新石器時代前期後半から中期への移行期のサハリン南部に、スラブナヤ 5 第 2 群のような無文／条痕文土器が存在したことがわかる。

なお、スラブナヤ 5 第 2 群の成形方法は、道東オホーツク海沿岸の早期中葉～後葉の条痕文系土器（湧別市川遺跡例など）にも認められる。北海道側の土器と対比する際、体部文様や条痕文の有無だけでなく、こうした面にも注意を払う必要がある。（福田）

6. ^{14}C 年代測定

分析試料は、2013 年スラブナヤ 5 遺跡 11 点（木炭 8 点、土器付着物 3 点）、2006・2008 年スラブナヤ 5 遺跡 2 点（土器付着物 2 点）、スラブナヤ 4 遺跡 13 点（土器付着物 13 点）である（表 1）。土器型式に関しては、上記を参考に、スラブナヤ 5・第 1 と 2 群、スラブナヤ 4 例をスラブナヤ 4 段階と表記した。過去のスラブナヤ 4・5 遺跡に関しては、すでに報告書が刊行されており（Грищенко 2011）、図版番号および注記番号を記した。2013 年スラブナヤ 5 遺跡は、出土地点、写真図版番号を掲載した。

^{14}C 年代測定における試料調製は、通常の方法に従いおこなった（吉田 2004）。化学処理におけるアルカリ処理濃度は、試料がすべて溶解しない程度にとどめた。試料の化学処理収率等を表 3 に示した。暦年較正年代値は OxCal v4.2.4（Bronk Ramsey 2013）を用い IntCal13 で較正した（表 2）。測定は、東京大学総合研究博物館のタンデム加速器（MALT）を用いた。

測定結果を表 1 に示した。2013 年スラブナヤ 5 遺跡大型ピット 1 および炭化物集中 1 出土木炭は 8770～7120BP、炭化物集中 2 出土木炭は、7350・7290BP である。年代に多少の幅が存在するが約 7500～7100BP の時期が多い。同遺跡の 2013 年出土土器付着物は、7250・7110・7040BP であり、土器付着物が木炭より古い年代を示すことを考慮すると、上記遺構の年代と正確には対応しない。2006・

表1 スラブナヤ5遺跡ほかの¹⁴C年代値
Tab.1 ¹⁴C ages of samples

No.	Site	Sample nr	Location, Annotated nr Reference, Figure nr	Pottery type	Material	¹⁴ C age (BP)	Lab. No.
1	Slavnaya 5 (2013)	13Sla5-2	Large pit 1, Con. Char. 1, C2		wood charcoal	7180 ± 60	MTC-17295
2		13Sla5-4	Large pit 1, Ash layer, C4		wood charcoal	7340 ± 70	MTC-17296
3		13Sla5-5	Large pit 1, Ash layer, C5		wood charcoal	7120 ± 50	MTC-17297
4		13Sla5-7	Large pit 1, Ash layer, C7		wood charcoal	8770 ± 60	MTC-17298
5		13Sla5-9	Large pit 1, Con. Char. 1, C9		wood charcoal	7870 ± 60	MTC-17023
6		13Sla5-12	Con. Char. 2, C10		wood charcoal	7350 ± 45	MTC-17024
7		13Sla5-13	Con. Char. 2, C11		wood charcoal	7290 ± 50	MTC-17025
8		13Sla5-17	Large pit 1, Con. Char. 1, C14		wood charcoal	7430 ± 80	MTC-17026
9		13Sla5-F1	PL.2-8	Early Slavnaya 5 complex	charred remains on pottery (inner)	7110 ± 60	MTC-17120
10		13Sla5-F2	PL.2-2	Early Slavnaya 5 complex	charred remains on pottery (inner ?)	7040 ± 50	MTC-17121
11		13Sla5-F3	PL.2-9	Early Slavnaya 5 complex	charred remains on pottery (inner)	7250 ± 60	MTC-17122
12	Slavnaya 5 (2006/2008)	Sla5-1	0712-439	Early Slavnaya 5 complex	charred remains on pottery (inner, rim)	7825 ± 50	MTC-16739
13		Sla5-2	0766-360	Early Slavnaya 5 complex	charred remains on pottery (inner)	7340 ± 50	MTC-16740
14	Slavnaya 4 (2005/2006)	Sla4-3	0737-953	Slavnaya 4 complex	charred remains on pottery (inner, rim)	7660 ± 50	MTC-16741
15		Sla4-4	0737-1133	Slavnaya 4 complex	charred remains on pottery (inner)	8410 ± 50	MTC-16742
16		Sla4-5	0737-4000, Грищенко 2011, Рис.47-1, 8135±50 (AA-79416)	Slavnaya 4 complex	charred remains on pottery (inner, rim)	8270 ± 50	MTC-16743
17		Sla4-6	0737-1134	Slavnaya 4 complex	charred remains on pottery (inner, rim)	8370 ± 50	MTC-16744
18		Sla4-7	0737-2193, 2194, 2202 Грищенко 2011, Рис.46-1	Slavnaya 4 complex	charred remains on pottery (inner, rim)	8500 ± 50	MTC-16745
19		Sla4-8	0737-3998, Грищенко 2011, Рис.48-1	Slavnaya 4 complex	charred remains on pottery (inner, rim)	8450 ± 50	MTC-16746
20		Sla4-9	0737-2179, Грищенко 2011, Рис.46-6	Slavnaya 4 complex	charred remains on pottery (inner, body)	8170 ± 50	MTC-16747
21		Sla4-10	0737-2140, Грищенко 2011, Рис.45-5	Slavnaya 4 complex (scallop shell impression)	charred remains on pottery (inner, bottom)	8260 ± 70	MTC-16748
22		Sla4-14	0737-950, Грищенко 2011, Рис.47-4	Slavnaya 4 complex (scallop shell impression)	charred remains on pottery (outer, bottom)	7920 ± 70	MTC-16749
23		Sla4-11	0737-1987	Late Slavnaya 5 complex	charred remains on pottery (inner, rim)	6855 ± 50	MTC-16866
24		Sla4-12	0737-1967	Late Slavnaya 5 complex	charred remains on pottery (outer, rim)	6670 ± 50	MTC-16867
25		Sla4-13	0737-3913	Late Slavnaya 5 complex	charred remains on pottery (inner)	7245 ± 45	MTC-16868
26		Sla4-15	0737-2195	Late Slavnaya 5 complex	charred remains on pottery (inner, rim)	6945 ± 45	MTC-16869
27	Gornozavodsk-2	Gor-2	Archaeology Quarterly 125	Unidentified pottery type	charred remains on pottery (inner, bottom)	6600 ± 220	MTC-17164
28		Gor-2re	(2013, frontispiece)	(scallop shell impression)		7760 ± 750	MTC-17272
29	Sedykh 1 (1991)	Sed-16	Kumaki et al. 2007, Fig.7-1	Tunaicha type	charred remains on pottery (inner, rim)	4490 ± 40	MTC-16870
30		Sed-17	Kumaki et al. 2007, Fig.8-1	Sedykh type	charred remains on pottery (outer, body)	3695 ± 40	MTC-16871
31		Sed-23	Vasilevski 2006, Fig.5-8	Sedykh type	charred remains on pottery (outer, rim)	3565 ± 35	MTC-16872

2008 年スラブナヤ 5 遺跡の土器付着物は、7825・7340BP であり、1 点は少し古い、2013 年調査の年代値と近い。スラブナヤ 4 遺跡の土器付着物の年代は、スラブナヤ 4 段階が 8500～7660BP (9 点)、スラブナヤ 5・第 1 群段階 (宗仁式) が 7245～6670BP (4 点) である。スラブナヤ 4 段階の若い年代値 (7660BP) は、CO₂ 収率が 15.1% と非常に低く、この値を除外した範囲は 8500～7920BP となる。スラブナヤ 5 遺跡の年代値 7825～7040BP (5 点) とは、明確に異なる。ちなみに、宗仁式の標式資料である宗仁共同牧場遺跡や乙名丘遺跡の土器付着物年代は、7095～6750BP (9 点) であり (福田他 2012)、今回の結果もほぼ同範囲である。スラブナヤ 5・第 2

群土器は、いずれも細片であるため型式学的には不明な点が多いが、年代的にはスラブナヤ 4 段階→スラブナヤ 5・第 2 群→スラブナヤ 5・第 1 群段階という流れになる。近年、チャイボ (Чайво) 6 遺跡などで出土しているプロト宗仁式の年代は、6945・6895BP (炭化物) であり、土器付着炭化物の年代差を約 500BP 程度と仮定すると、スラブナヤ 5・第 2 群の年代と近い。

サハリンと北海道における当該期の土器型式の時間的な関係は、國木田他 (2014) で議論した。土器付着炭化物の受ける海洋リザーバー効果は、地域間や内容物で異なる可能性があるため、多少の齟齬はあるかもしれない⁴⁾。北海道の石刃鍬石器群は約 7500～7000BP (土器付着物では約 8000～7500BP) であり、

表2 測定試料の暦年較正年代値、炭素・窒素同位体比、C/N比
 Tab. 2 Calibrated ages and $\delta^{13}\text{C}$, $\delta^{15}\text{N}$, C/N values of samples

No.	Sample nr	^{14}C age (BP)	Calibrated age (calBP, 1 σ)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	$\delta^{15}\text{N}$ (‰)	C (%)	N (%)	C/N
1	13Sla5-2	7180 $\pm$ 60	8046-7937 (68.2%)	-26.1				
2	13Sla5-4	7340 $\pm$ 70	8280-8266 (4.0%), 8203-8035 (64.2%)	-26.7				
3	13Sla5-5	7120 $\pm$ 50	7998-7927 (53.4%), 7896-7871 (14.8%)	-27.8				
4	13Sla5-7	8770 $\pm$ 60	9901-9668 (68.2%)	-26.1				
5	13Sla5-9	7870 $\pm$ 60	8771-8585 (68.2%)	-24.8				
6	13Sla5-12	7350 $\pm$ 45	8278-8268 (3.4%), 8202-8151 (30.7%) 8143-8130 (4.6%), 8123-8049 (29.5%)	-26.0				
7	13Sla5-13	7290 $\pm$ 50	8162-8046 (68.2%)	-27.4				
8	13Sla5-17	7430 $\pm$ 80	8334-8183 (68.2%)	-27.4				
9	13Sla5-F1	7110 $\pm$ 60	7998-7926 (51.2%), 7897-7869 (17.0%)	-23.2	12.5	29.6	3.3	10.6
10	13Sla5-F2	7040 $\pm$ 50	7940-7835 (68.2%)	-25.3	8.5	28.2	0.5	68.1
11	13Sla5-F3	7250 $\pm$ 60	8160-8085 (38.2%), 8067-8010 (30.0%)	-22.7	12.9	42.0	4.5	10.9
12	Sla5-1	7825 $\pm$ 50	8647-8544 (68.2%)	-22.4	15.0	42.0	4.7	10.5
13	Sla5-2	7340 $\pm$ 50	8195-8047 (68.2%)	-23.7	12.1	28.9	2.8	12.2
14	Sla4-3	7660 $\pm$ 50	8517-8493 (14.6%), 8480-8405 (53.6%)	-24.0	10.4	20.0	2.2	10.8
15	Sla4-4	8410 $\pm$ 50	9494-9403 (63.2%), 9342-9330 (5.0%)	-23.8	11.4	32.2	3.9	9.6
16	Sla4-5	8270 $\pm$ 50	9398-9358 (12.8%), 9314-9198 (40.5%) 9180-9137 (14.9%)	-22.0	16.4	52.2	7.4	8.3
17	Sla4-6	8370 $\pm$ 50	9466-9396 (41.0%), 9361-9309 (27.2%)	-21.8	14.9	45.6	6.0	8.9
18	Sla4-7	8500 $\pm$ 50	9532-9483 (68.2%)	-20.4	18.1	42.7	5.8	8.6
19	Sla4-8	8450 $\pm$ 50	9524-9451 (68.2%)	-21.5	16.7	49.7	7.0	8.3
20	Sla4-9	8170 $\pm$ 50	9239-9221 (5.9%), 9205-9175 (10.1%) 9140-9024 (52.2%)	-23.7	11.7	30.2	3.6	9.9
21	Sla4-10	8260 $\pm$ 70	9399-9357 (10.7%), 9317-9128 (57.5%)	-18.5	17.2	12.9	2.1	7.3
22	Sla4-14	7920 $\pm$ 70	8971-8916 (13.4%), 8895-8885 (2.3%) 8864-8830 (8.7%), 8787-8635 (43.7%)	-23.4	10.3	37.2	6.4	6.8
23	Sla4-11	6855 $\pm$ 50	7737-7651 (58.4%), 7644-7623 (9.8%)	-23.4	13.1	45.2	4.4	12.0
24	Sla4-12	6670 $\pm$ 50	7585-7505 (68.2%)	-25.0	12.5	59.2	2.2	31.2
25	Sla4-13	7245 $\pm$ 45	8156-8089 (34.3%), 8059-8004 (33.9%)	-23.0	14.1	42.8	5.2	9.5
26	Sla4-15	6945 $\pm$ 45	7826-7715 (68.2%)	-23.7	10.9	53.3	4.2	14.8
27	Gor-2	6600 $\pm$ 220	7675-7275 (68.2%)	-24.3				
28	Gor-2re	7760 $\pm$ 750	9537-7915 (66.7%), 7906-7853 (1.5%)					
29	Sed-16	4490 $\pm$ 40	5283-5211 (27.3%), 5201-5161 (14.7%) 5139-5103 (13.4%), 5083-5048 (12.8%)	-23.9	13.7	57.5	4.3	15.6
30	Sed-17	3695 $\pm$ 40	4088-3977 (68.2%)	-23.7	8.5	62.4	1.1	65.6
31	Sed-23	3565 $\pm$ 35	3920-3827 (64.9%), 3787-3778 (3.3%)	-24.2	13.9	64.4	1.4	54.0

今回のスラブナヤ 4 段階の後半からスラブナヤ 5・第 2 群段階と関係し、石器群との関係でも大きな矛盾は生じない。ただし、スラブナヤ 4 段階の土器付着物年代 (8500 ~ 7920BP) は、テンネル・暁式の土器付着物年代 (8430 ~ 7920BP、大正 6・7 遺跡の古段階以外) と多くの範囲で並行すると考えられるため、今後石器群との詳細な比較検討が必要となろう。スラブナヤ 4 段階でホタテ貝背圧痕文を有する試料の年代値 (8260・7920BP) は、テンネル・暁式と同範囲に入る。

関連資料として、ネベリスク (Невельский) 地区ゴルノザボーツク (Горнозаводск) 2 遺跡の表採資料⁵⁾、コルサコフ (Корсаковский) 地区セディフ (Седых)

1 遺跡の土器付着物の測定もおこなった。ゴルノザボーツク 2 遺跡の試料は、2 回測定をおこなったが、CO₂ 収率が 2.8・3.2% と非常に低く、グラファイト量も通常の 1/10 であったため、精度の悪い結果となっている。年代値は、7760・6600BP で、誤差や試料状態を考慮すると、新石器時代前期の所産としかいえない。ただし、上記のスラブナヤ 4 段階よりは、後続するスラブナヤ 5・第 2 群や宗仁式に近い可能性が高い。詳細な検討は、今後の追加資料の出土を待ちたい。セディフ 1 遺跡は、トゥナイチャ (Тунайча) 式が 4490BP、セディフ式が 3695・3565BP で、これまでの報告例 (Васи́левский 2008) と近い結果となっている。(國木田)

表3 測定試料の化学処理収率
Tab. 3 Results of chemical treatment

No.	Sample nr	Amount used (mg)	After AAA (mg)	After AAA (%)	Amount oxidation (mg)	CO ₂ amount (mg)	CO ₂ yield (%)
1	13Sla5-2	38.3	13.1	34.1	2.2	1.2	56.5
2	13Sla5-4	18.9	5.2	27.2	1.9	1.1	58.0
3	13Sla5-5	35.3	18.3	51.7	2.0	1.2	58.6
4	13Sla5-7	33.1	21.2	64.2	2.2	1.4	62.7
5	13Sla5-9	40.9	8.4	20.4	2.0	1.2	59.5
6	13Sla5-12	22.3	6.5	29.3	2.0	1.2	61.5
7	13Sla5-13	97.8	27.1	27.7	2.0	1.2	60.9
8	13Sla5-17	22.4	5.0	22.3	1.8	1.1	63.4
9	13Sla5-F1	21.8	11.8	54.2	3.2	0.9	27.4
10	13Sla5-F2	12.6	6.2	49.5	2.8	0.8	28.9
11	13Sla5-F3	38.8	21.5	55.5	3.4	1.3	39.7
12	Sla5-1	19.5	13.3	68.4	2.3	0.9	38.2
13	Sla5-2	18.1	10.7	58.9	2.4	0.6	25.6
14	Sla4-3	71.7	31.1	43.4	2.4	0.4	15.1
15	Sla4-4	22.7	14.7	64.8	2.3	0.6	26.9
16	Sla4-5	17.0	10.5	62.1	2.2	1.0	48.4
17	Sla4-6	12.0	7.5	62.9	2.1	1.0	46.0
18	Sla4-7	8.4	3.9	46.1	1.8	0.6	34.3
19	Sla4-8	11.4	7.6	66.4	2.0	1.0	48.5
20	Sla4-9	62.3	36.0	57.9	2.1	0.6	26.6
21	Sla4-10	5.7	2.8	48.1	1.4	0.3	19.6
22	Sla4-14	4.2	1.6	38.9	1.1	0.4	36.1
23	Sla4-11	15.7	9.3	59.0	2.1	1.0	46.9
24	Sla4-12	24.6	15.4	62.5	2.3	1.3	58.3
25	Sla4-13	34.2	20.7	60.4	2.5	1.2	47.6
26	Sla4-15	7.4	3.8	51.4	1.8	0.9	50.3
27	Gor-2	16.7	9.6	57.6	4.1	0.1	3.2
28	Gor-2re				3.5	0.1	2.8
29	Sed-16	20.1	12.7	63.3	2.1	1.1	54.1
30	Sed-17	4.8	2.4	50.9	1.3	0.7	56.5
31	Sed-23	19.7	13.2	67.2	2.2	1.4	65.0

7. 炭素・窒素同位体測定、C/N 比分析

¹⁴C 年代測定とあわせて、土器付着物の炭素・窒素同位体、C/N 比測定もおこなった（表 2）。測定は SI サイエンス株式会社に依頼した。図 11・12 に、土器型式ごとにプロットしている。試料はすべて内面土器付着物である。2013 年スラブナヤ 5 遺跡の 1 試料（13Sla5-F2）は、肉眼観察では内面と判断したが、測定結果では外面の傾向を示した。もし、内面であれば堅果類等の植物資源の可能性が考えられるが、土器が細片であるため、評価は保留しておきたい。

各型式とも C₃ 植物・草食動物の領域から海生生物の領域を結んだ範囲より、やや窒素同位体が高い領域

に分布している（ $\delta^{13}\text{C}$ 値：-24.0 ～ -18.5‰、 $\delta^{15}\text{N}$ 値：10.4 ～ 18.1）。 $\delta^{13}\text{C}$ 値が -24‰より重く、 $\delta^{15}\text{N}$ 値が 10‰より高い傾向は、海洋資源（遡上性のサケ・マス類も含む）の影響が考えられる。 $\delta^{15}\text{N}$ 値が 15‰を超えるスラブナヤ 4 段階の試料（4 点）は、特に海産物の影響が強いと判断できる。このような試料は、現状ではオホーツク文化の一部等にしか確認できず（Kunikita et al. 2013）、海洋資源に特化した内容物と推定できる。試料数の増加を待つ必要があるが、宗仁式やトゥナイチャ式は、スラブナヤ 4 段階より海洋資源の影響が少ない印象を受ける。（國木田）

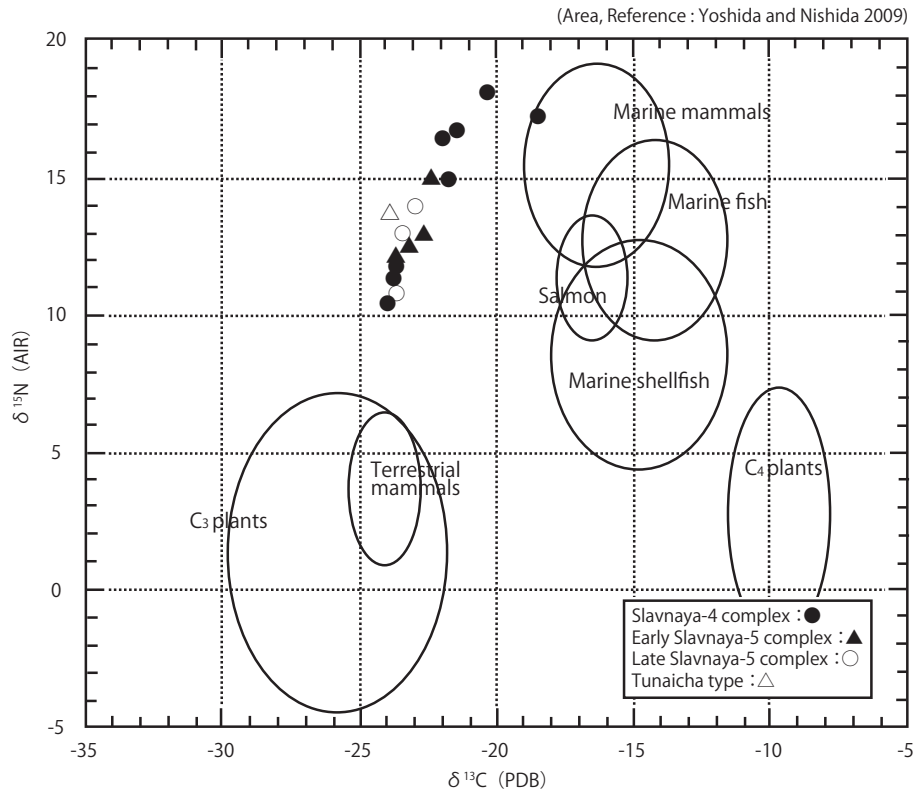


図11 内面土器附着炭化物の炭素・窒素同位体比
Fig. 11 Carbon and nitrogen isotope ratios of the charcoal found on the inner surfaces of pottery

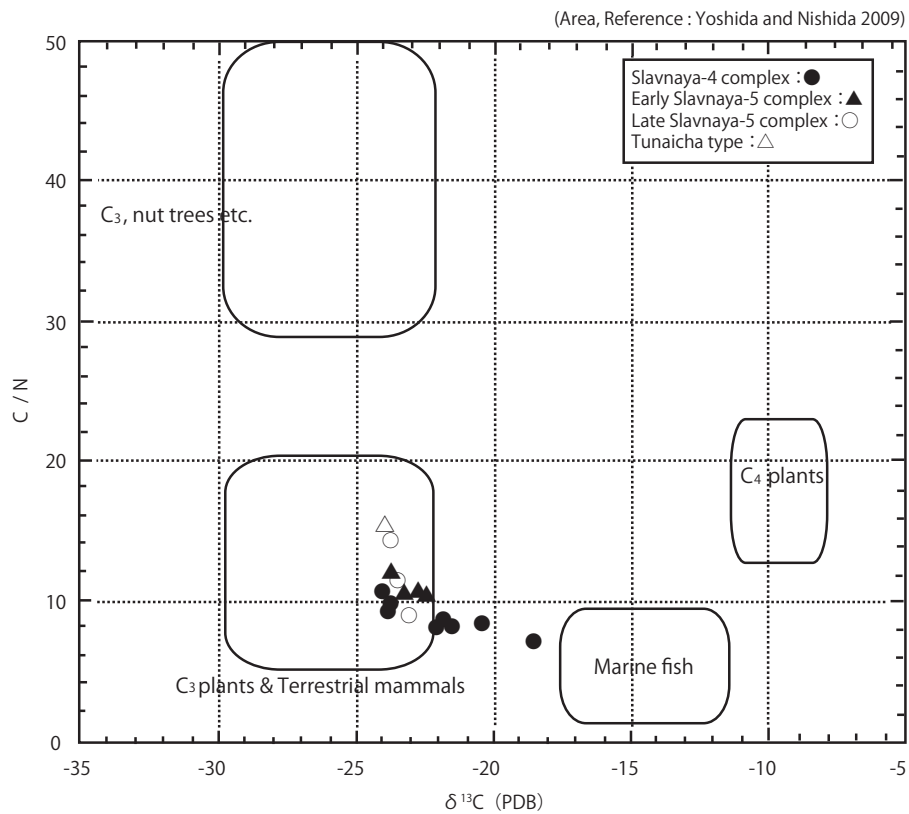


図12 内面土器附着炭化物の炭素同位体比・C/N比
Fig. 12 Carbon isotope ratios and C/N values of the charcoal found on the inner surfaces of pottery

8. まとめ

2013年スラブナヤ5遺跡発掘調査に関する分析・研究の成果から、以下のことがいえる。

① スラブナヤ5遺跡第1地点の新石器時代前期遺物包含層は、2013年調査第3発掘区まで、東にひろがる。ただし、この周辺は埋没後攪拌が基盤層まで到達する箇所が多い。遺物包含層は断続的／局所的に遺存している可能性が高い。

② 第3発掘区南端部で、炭化物集中を上部に伴うピット状遺構が発見された。出土木炭の¹⁴C年代測定結果は、年代に多少の幅はあるが、約7500～7100BPの時期が多い。

③ 検出遺構は、遺物を伴う炭化物・灰が堆積した自然地形の窪み、または自然地形を利用した遺構のいずれかである。第1、第2発掘区検出の類似遺構とは異なり集石が伴わず、遺構と関連すると判断できる遺物が少ない。また、出土木炭の¹⁴C年代にバラツキがあり、機能を特定する要素もない。そのため、遺物とともに炭化物・灰が溜まった窪みである可能性が高い。

④ 出土遺物はすべて、新石器時代前期のものである。石器は、石刃石器（石刃鏃、石鏃、彫器、搔器、削器、石錐）、磨製石器（石錐、石鑿、棒状石器）、石斧、砥石、溝付砥石がある。磨製石器はアムール下流域のヤミフタ文化に類例がある。土器に関して、わずかであるが、内面条痕文をもつ深鉢胴部片がある。スラブナヤ4遺跡の土器よりは新しく、宗仁式に近い成形・調整・胎土混和の技術が認められる。

⑤ 土器付着物の¹⁴C年代は、スラブナヤ4段階→スラブナヤ5・第2群段階→スラブナヤ5・第1群段階となる。この順序は、土器や石器の変化とも整合する。第3発掘区の文化層（Ⅱ層）は、スラブナヤ5・第2群段階、つまりスラブナヤ5古段階を中心とした時期に形成された可能性が高い。

⑥ スラブナヤ5古段階の年代は、北海道東部の縄文早期の石刃鏃石器群期にほぼ並行するが、石器組成が異なる。一方、土器の成形・調整方法には共通性がある。こうした点を考慮し、さらに居住形態等にも注意を払いながら、当該期の北海道－サハリン間の関係について議論したい。（福田）

[注]

- 1) 宗仁式土器を伴う文化は、遺跡がサハリン南部に集中するため、以前は南サハリン文化と呼ばれていた（ワシレフスキー 1992 他）。しかし近年は、伊東信雄の設定した日本語型式名をそのま

ま使用することが通例となっている（伊東 1942；Vasilevski et al. 2006；Василевский 2008 参照）。

- 2) 石材分類は森先がおこなった。石器の実測は役重・夏木・高鹿・森先が担当し、トレースは森先が担当した。
- 3) 写真3と石器実測図の対応は、以下のとおりである。1: 図5-2、2: 図5-1、3: 図5-5、4: 図5-4、5: 図5-3、6: 図5-9、7: 図7-5、8: 図7-4、9: 図6-9、10: 図7-2、11: 図6-1、12: 図6-2、13: 図7-3、14: 図9-1、15: 図8-8、16: 図9-3、17: 図8-4、18: 図8-3、19: 図8-2、20: 図8-1
- 4) 近年の研究では、貝塚出土の炭化物と貝のペア試料から海洋リザーバー効果地域オフセット値(ΔR)を評価している(詳しくは、白杵・國木田 2014)。日本海やオホーツク海沿岸地域に生息する貝類は、宗谷暖流等の影響を受けて海洋リザーバー効果は小さく、噴火湾周辺や釧路は、北太平洋の深層水の影響で大きくなる。海獣類やサケ・マス類は、これらの海流域を超えて活動するため、評価が難しい。本論では、現状での見解とご理解頂きたい。
- 5) 本資料は、サハリン在住の郷土史研究家シカベニョフ（Шкабенёв B.B.）氏による採集資料である。季刊考古学第125号の口絵「サハリンの前期新石器文化と縄文文化」のなかで、「ホタテガイを製作台とした土器」として紹介された資料であり、西脇対名夫がその存在に注目した(水ノ江・西脇 2013)。シカベニョフ氏は、サハリン国立大学における先述のワークショップに、この土器片を含むゴルノザボーツク2遺跡採集遺物を持参し、我々に意見を求めた。その場で観察をおこない、微量ではあるが土器付着物が残ることを確認し、國木田が¹⁴C年代測定を担当した。

[引用文献]

- 伊東信雄 1942 「樺太先史土器編年試論」『喜田博士追悼記念國史論集』大東書館、3-44
- 白杵勲・國木田大 2014 「北海道における縄文時代年代研究と貝塚の年代測定」『日本考古学協会 2014 年度伊達大会研究発表資料集』同実行委員会、233-240
- 大貫静夫 1992 「極東の先史文化」『季刊考古学』38：17-20
- 大貫静夫 2010 「北東アジア新石器社会の多様性」『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会、71-86
- 大貫静夫・佐藤宏之編 2005 『ロシア極東の民族考古学』六一書房
- 大貫静夫・福田正宏編 2014 『科学研究費助成事業『環日本海北回廊の考古学的研究』研究集会 環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明：『石刃鏃文化』に関する新たな調査研究』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻
- 國木田大・吉田邦夫・中野拓大 2006 「北海道東部における土器付着炭化物の炭素14年代測定」伊藤慎二・山添奈苗編『東アジア世界における日本基層文化の考古学的解明』國學院大學21世紀COEプログラム第1グループ考古学班、166-176
- 國木田大・吉田邦夫・伊藤慎二・小林達雄・藤本強 2007 「石刃鏃文化に関する年代学的検討」佐藤宏之編『第8回北アジア調査研究報告会 発表要旨』同実行委員会、63-66
- 國木田大 2014 「石刃鏃石器群の年代」大貫静夫・福田正宏編『科学研究費助成事業『環日本海北回廊の考古学的研究』研究集会 環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明：『石刃鏃文化』に関する新たな調査研究』東京大学大学院人文社会系研究科考

- 古学研究室・東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻, 25-34
- 熊木俊朗・福田正宏・榊田朋広・森岬子・宇田川洋・ワシレフスキー, A.A. 2007 「追加資料: セディフ 1 遺跡の出土資料再報告」熊木俊朗・福田正宏編『極東ロシアにおける新石器時代から鉄器時代への移行過程に関する考古学的研究』東京大学常呂実習施設研究報告 3, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 106-112
- 佐藤宏之 2014 「石刃鉄石器群の多様性と共通性」大貫静夫・福田正宏編『科学研究費助成事業『環日本海北回廊の考古学的研究』研究集会 環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明: 『石刃鉄文化』に関する新たな調査研究』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻, 107-118
- 夏木大吾・ワシレフスキー, A.・大貫静夫・佐藤宏之・グリシェンコ, V.・福田正宏・熊木俊朗・國木田大・パシンツェフ, P.・モジャエフ, A.・森先一貴・ペレグドフ, A.・役重みゆき・高鹿哲大・ルシカ, G. 2014 「2013 年度スラブナヤ 5 遺跡発掘調査報告」『第 15 回北アジア調査研究報告会 発表要旨』同実行委員会, 9-12
- 福田正宏 2011 「総括」福田正宏・シェフコムード, I. Ya.・内田和典・熊木俊朗編『東北アジアにおける定着的食料採集社会の形成および変容過程の研究』東京大学常呂実習施設研究報告 9, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 265-268
- 福田正宏 2014 「ロシア極東・道東におけるこれまでの調査成果」大貫静夫・福田正宏編『科学研究費助成事業『環日本海北回廊の考古学的研究』研究集会 環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明: 『石刃鉄文化』に関する新たな調査研究』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻, 9-16
- 福田正宏・阿子島香・國木田大・吉田邦夫 2012 「宗仁式土器の再検討: 伊東信雄コレクションの型式と年代」『*Bulletin of Tohoku University Museum*』11, 201-208
- 福田正宏・佐藤宏之・國木田大・役重みゆき・夏木大吾・垣内彰悟・久我谷溪太・西村広経・高鹿哲大・熊木俊朗・辻誠一郎・森先一貴 2014 「北海道湧別市川遺跡の発掘調査」『第 15 回北アジア調査研究報告会 発表要旨』同実行委員会, 21-24
- 福田正宏・シェフコムード, I. Ya.・森先一貴・熊木俊朗編 2014 『環日本海北回廊の考古学的研究 (I): ヤミフタ遺跡発掘調査報告書』東京大学常呂実習施設研究報告 11, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設
- 水ノ江和同・西脇対名夫 2013 「縄文文化の境界問題を考える」『季刊考古学』125: 14-17
- 森先一貴 2014 「ロシア極東における石刃鉄を伴う石器群」大貫静夫・福田正宏編『科学研究費助成事業『環日本海北回廊の考古学的研究』研究集会 環日本海北回廊における完新世初頭の様相解明: 『石刃鉄文化』に関する新たな調査研究』東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室・東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻, 107-118
- ヤンシナ, O.V.・ゴルブノフ, S.V.・クズミン, Ya.V. 2012 「サハリン新石器時代前期に関する諸問題」佐藤宏之編, 福田正宏訳『黒曜石の流通と消費からみた環日本海北部地域における更新世人類社会の形成と変容 (I)』東京大学常呂実習施設研究報告 10, 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設, 10-26
- 吉田邦夫 2004 「火炎土器に付着した炭化物の放射性炭素年代」新潟県立歴史博物館編『火炎土器の研究』同成社, 17-36
- 吉田邦夫・西田泰民 2009 「考古科学が探る火炎土器」新潟県立歴史博物館編『火炎土器の国 新潟』新潟日報事業社, 87-99
- ワシレフスキー, A.A. 1992 「サハリン島の新石器文化」木村英明訳『北海道考古学』28, 115-136
- ワシレフスキー, A.A. 2006 「サハリン州コルサコフ地区オホーツコエ村『セディフ遺跡群』における新石器時代・初期鉄器時代・中世の考古学的文化複合」福田正宏・熊木俊朗訳『北海道考古学』42: 1-16
- Василевский А. А. 2008 *Каменный век острова Сахалин*. Сахалинское книжное издательство.
- Василевский А.А., Грищенко В. А. 2002 Памятники переходного периода от палеолита к неолиту на Сахалине. 『第 3 回北アジア調査研究報告会』予稿集, 同実行委員会, 36-41
- Грищенко В. А. 2011 *Ранний неолит острова Сахалин*. СахГУ.
- Грищенко В. А., Можаяев А.В. 2006 Раскопки поселения Славная-4 и стоянки Славная-5 на острове Сахалин в 2006 году. *Проблемы археологии, этнографии, антропологии Сибири и сопредельных территорий*, Т. XII, Ч. 1: с. 55-59.
- Шубин В.О. 2008 Археологические исследования в Ногликском районе Сахалинской области в рамках проекта «Сахалин-2». *Природа, история и культурное наследие Сахалинской области: Исследования и открытия*. Сахалинское книжное издательство.
- Kunikita, D. I. Shevkomud, K. Yoshida, S. Onuki, T. Yamahara, H. Matsuzaki 2013 Dating charred remains on pottery and analysing food habits in the Early Neolithic periods in Northeast Asia. *Radiocarbon*, 55: 1334-1340.
- Vasilevski A.A., T. Suto, K. Akoshima, T. Haneishi and T. Yanagida 2006 The list of the Professor of Tohoku University Ito Nobuo's collections, made up in Karafuto-Sakhalin during his personal scientific trip around the Middle and Southern parts of the island in 1933-1934. *Bulletin of the Tohoku University Museum*, 5: 57-82.

A Report on Archaeological Excavations at the Early Neolithic Site of Slavnaya-5, Sakhalin Island, Russia

FUKUDA, M., V. A. GRISHCHENKO, A. A. VASILEVSKII, S. ONUKI, T. KUMAKI, D. KUNIKITA, K. MORISAKI, H. SATO, A. V. MOZHAEV, P. A. PASHENTSEV, A. S. PEREGUDOV, M. YAKUSHIGE, D. NATSUKI and A. KOROKU

The eastern part of the Slavnaya-5 site, South Sakhalin Island, Russia, was excavated in 2013 (Excavation #3) (Fig. 1). This study was conducted through the Japan and Russia Academic Exchange Agreement, concluded between the Department of Archaeology, University of Tokyo, and the Laboratory of Archaeology and Ethnography, Sakhalin State University.

The stratigraphy at Excavation #3 comprised Layer I: surface, Layer II: the Early Neolithic cultural horizon and Layer III: natural ground (bedrock). A high level of post burial disturbance (modern cultivation, tree roots, etc.) was observed in most layers. However, in the lower part of Layer II, Large Pit 1 and Pits 1 and 2 were discovered along the southern zone of the excavation. These are depressions with scatters of carbon, ash and artifacts. The ^{14}C dates of the wood charcoal samples fall between 7500-7100 BP. (Tab. 1).

Lithic assemblages are characterized mainly by reduction modes for blades, bifaces, and ground stone tools (Fig. 5,6,7,8,9,10; PL. 3). Microblade reduction is not evident here. The lithic assemblage includes blade arrowheads, arrowheads, burins, endscrapers, sidescrapers, drills, bifaces, chipped axes, ground axes, ground drills, ground chisels, other ground tools, and grinding stones. The similarity with the 'Blade Arrowhead Industry' of Hokkaido is observed. On the other hand, similar ground stone tools were found at the Early Neolithic site of Yamikhta in the Lower Amur. The pottery making technology resembles that of the early group from Excavations #1 and #2 (2006, 2008), and linear incisions on the inner body are observed (PL. 2). This group can be situated between the Slavnaya-4 complex and the Middle Neolithic Soni type pottery (Late group of Slavnaya-5).

The ^{14}C dates from charred remains on pottery from the Slavnaya 4 and 5 sites fall into three stages, which are as follows:- the Slavnaya-4 stage (8500-7660 BP), the Early Slavnaya-5 stage (7825-7040 BP), and the Late Slavnaya-5 stage (7245-6670 BP).

The Early Slavnaya-5 stage of the Sakhalin Island is almost contemporary with the period of expansion of the complex of blade arrowheads and flat bottomed pottery with linear incisions in the Okhotsk Area of Hokkaido Island. However, debating socio-cultural relationships between the two islands would require further comparisons of the lithic assemblages and pottery making techniques, including aspects of the settlement system and other features.



1. Upper part of the features in Layer II (South zone)



2 Cross section of the Large pit 1 (South zone)



3 Layer III (South zone)



4 Layer III (North zone)

写真 1 スラブナヤ 5 遺跡第 1 地点第 3 発掘区
PL. 1 Excavation #3 at Point.1 of the Slavnaya-5 site



1



2



3



4



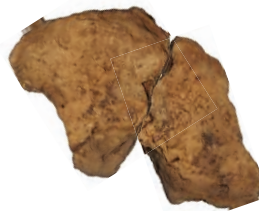
5



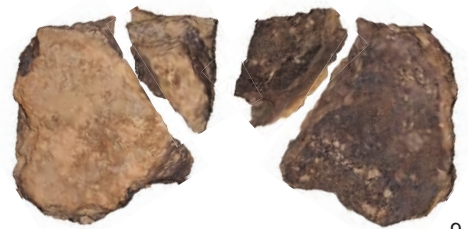
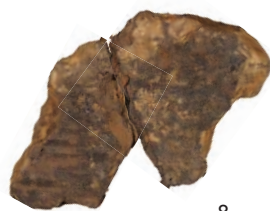
6



7



8



9

写真 2 第 3 発掘区出土土器(縮尺: 1/1)
PL. 2 Pottery from Excavation #3 (Scale: 1/1)



写真3 第3発掘区出土石器（縮尺：7・14-16, 1/2; その他 2/3）
PL. 3 Stone tools from Excavation #3 (Scale: 7, 14-16, 1/2; others, 2/3)